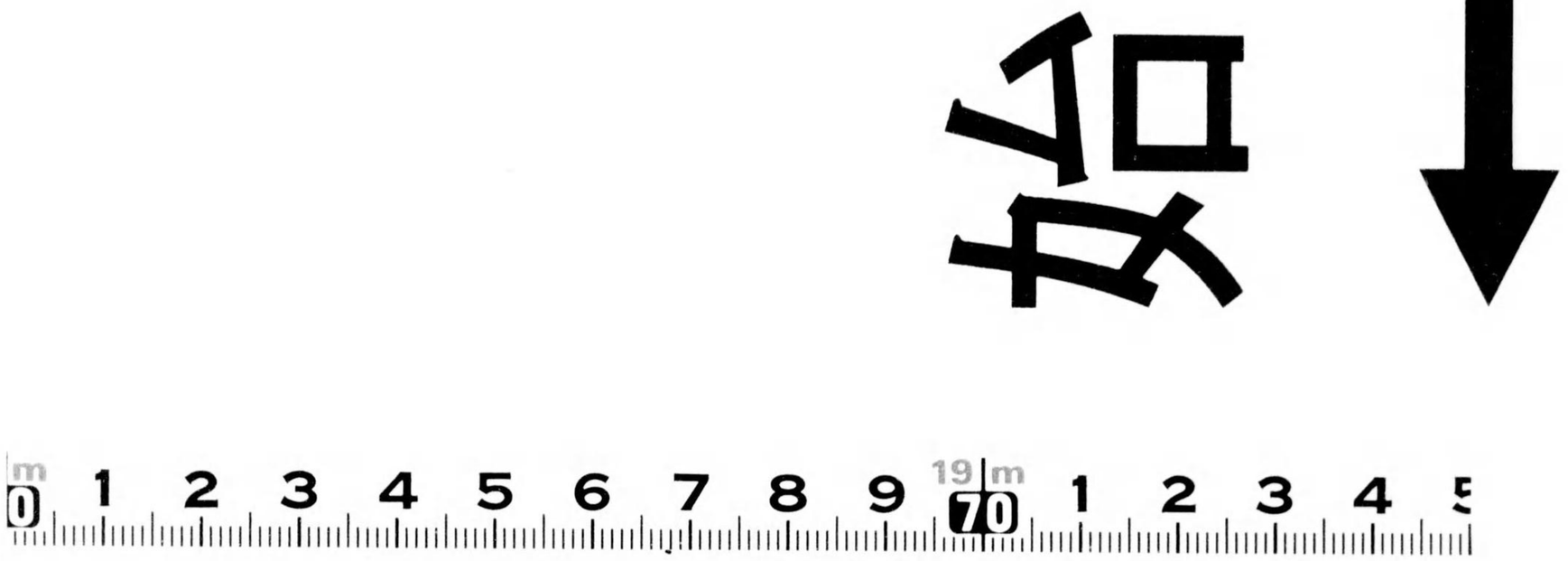
m
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9
19 m
70 1 2 3 4 5

特100
243

帝國圖書館藏

東京府立第四中學校教諭 淵脇邃著

警察文庫編

漢文詳解

全

日本警察新聞社發行

大正
4. 9. 2
内交

自序

本書は曩に友人日本警察新聞社長中村彌助君の需により、中學漢文科の教程を參酌し、專ら文官普通試驗に應ぜんとする者の學習用として之を講述し、而して君の主宰せる日本講學會の講義錄中に寄稿せしもの、頃日君また改版して世に公にせんとし、來りて之を余に謀る。乃ち更に增補修訂を加へ、以て其の議を贊すと云爾。

大正乙卯八月

著者識

例言

一、國文と漢文とを對照し、以て文の主要成分の位置について説明したるは、これによりて漢文講讀の素地をつくらんがためなり。

一、紙數に限あれば、材料の選定には最も意を用ゐざるべからず。本書は主として、漢文の講讀に熟すると共に、一面修養に資すべき者を擇べり。

一、時に隨つて字形の説明をも加へたるは、讀者をして文字の異同と其の意義とを十分に辨識し、文意を正確に會得し、及ぶかぎり其の應用を廣くせしめんと欲してなり。

一、送假名法、句點法の如きは、今日なほ未だ一定せずと雖、本書に於いては、

各種學校の國漢文讀本を參照して略ゝこれが標準を立て、句點『。』讀點『、』小讀點『・』をわかち、引用符「　」を用ゐたり

一、假名遣は舊來の法則に據りたれども、漢字には時に或は我が國の慣用音を取れるものなきにあらず。又「用」の活用は和行上一段說に從へり。

漢文詳解

淵脇邃

まづ漢文の組織から說くのが順序だと思ふけれども、其の前に一二の文章について解釋を試み、しかる後に組織上の事に及ぼし、其の概說を終へてから、更に文章の講義に移ることにしよう。文中の語句を所々から取出して、別に上欄に掲げたのは、國文と漢文との組織上の異同に就いて、豫め讀者の注意を促したいためである。

宮城

これは依田學海先生の文である。先生は名を百川といひ、字を朝宗といひ、舊佐倉藩士で、維新の際には尊王の大義を唱へ、官途の經歷もあるが、明治四十二年十二月に歿せられた。

東京市の中央にあり。

○宮城在二東京市中央一。周圍繞以二深濠一。有二櫻田・半藏等諸門一。二重橋爲二正門一。』城內古松蒼鬱、瑞雲靉靆。可三以見二太平氣象一矣。』正殿・豐明殿、樓閣臺榭、隱二現樹間一。人民徘徊瞻望、有二垂レ涙拜伏者一、非レ無レ故也。』城外平坦、細莎如レ茵、道路縱橫。有二楠木中將銅像一立焉。極偉觀也。』宮城內外、置二電燈數十基一。煌如二白晝一。』

○宮城は東京市の中央に在り。周圍は繞らすに深濠を以てす。櫻田・半藏等の諸門あり。二重橋を正門と爲す。』城內は古松蒼鬱として、瑞雲靉靆たり。以て太平の氣象を見る可し。」正殿・豐明殿、樓閣臺榭、樹間に隱現す。人民徘徊瞻望し、涙を垂れて拜伏する者あるは、故なきに非ざるなり。』城外は平坦にして、細莎茵の如く、道路縱橫せり。楠木中將の銅像ありて立つ。極めて偉觀なり。』宮城の內外には、電燈數十基を置く。煌として白晝の如し。』

在二東京市中央一。

古松蒼鬱たり。

古松蒼鬱。

瑞雲靉靆たり。

瑞雲靉靆。

太平の氣象を見る。

見二太平氣象一。

樹間に隱現す。

隱二現樹間一。

涙を垂る。

垂レ涙。

故なきに非ざるなり。

〔摘解〕深濠＝ふかきほり。濠は「城下の池」をいふ。○蒼鬱＝樹木の青々と茂りたるさま。蒼は「深き青色」とか、又は「しげる」とかいふ字。鬱は「木のゴンモリと生え茂りたる」をいふ。○瑞雲＝めでたいくも。○靉靆＝雲の盛んにたなびきたるさま。○太平＝やすらかに治まれること。太平は泰平に同じ。○氣象＝おもむき。ありさま。○樓閣＝たかどの。○臺榭＝うてな。臺は「高い土臺の上に在る建物をいひ、榭は「樹木のある處に建てられたるもの」をいふ。○隱現＝かくれたり見えたりすること。現は見や顯と音義おな

じ。○徘徊＝ぶらぶらして居ること。行きつもどりつ、うろうろすること。○瞻望＝はるかに仰いで見ること。○細莎＝こまかいはますげ。莎は又「香附子」ともいふ。○茵＝しとね。むしろ。茵は蓐や席と意味おなじ。此の字は、「黴菌」の「菌」の字と見ちがへ易い。○偉觀＝すぐれたるみもの。○煌＝きらきらと輝くさま。○白晝＝ひるま。

〔通釋〕宮城は東京のまんなかに在る。其の周圍には深い濠が繞らしてあり、櫻田門や半藏門などいふ諸門が設けてある。二重橋が宮城の正門である。』城内には年ふりたる松が青々と茂りあうて居て、めでたい雲が盛んにたなびいてゐる。これにも、安らかに治まれる御世のさまが見えてゐる。』正殿や豐明殿や、多くのたかどの・うてなが、木の間に隱れたり見えたりする。城外を

非レ無レ故也。
城外は平坦なり。城外平坦。細莎、茵の如し。細莎如レ茵。
道路、縱橫せり。道路縱橫。
電燈數十基を置く。置二電燈數十基一。
煌として白晝の如し。煌如二白晝一。

通行する人民が、ゆきつ戻りつぶらぶらして、はるかに皇居を仰ぎ見ては、涙を垂れて伏し拜むことのあるのは、故ないことではない。其れは皇恩の有難さが胸に浮び來て、覺えず涙をもよほすのである。』城外は平坦であつて、香附子といふ細い草が、蓐のやうに一面に生えて、道路は縱橫に通つて居る。左近衞中將楠木正成朝臣の銅像も宮城外に立つてゐるが、其れがまた極めてすぐれた見ものである。』宮城の内外には、電燈が數十基ほど置かれてあるから、夜間には其の光がきらきらと輝いて、丁度ひるまのやうである。』

正之拜闕

○高山正之、上野人也。字彥九郎、家世農。正之生而俊異、喜讀レ書、略通二大

義ニ。爲レ人白晳精悍、眼光射レ人、聲如レ鐘。有ニ奇節一。』喜 交ニ文學士一。聞ニ人說ニ孝子義僕事一、雖レ遠 輒往問レ之、轉述ニ之於人一、殷殷 淚隨レ聲墮。談ニ古今君臣順逆跡一、慷慨如ニ己與同レ時關ニ其事一。』少入ニ平安一。至ニ三條橋東一、問ニ皇居何方一、遙ニ過ニ足利高氏墓一、數ニ其罪惡一大罵、鞭レ之三百。』

○高山正之は上野の人なり。字は彦九郎といひ、家世農なり。正之生れて俊異にして、喜みて書を讀み、略大義に通ず。人と爲り白晳精悍にして、眼光は人を射て、聲は鐘の如し。奇節あり。」喜みて文學の士に交る。人の孝子義僕の事を說くを聞けば、遠しと雖ち往きて之を問ひ、轉じて之を人に述べ、殷殷として淚は聲に隨ひて墮つ。古今君臣順逆の跡を談ずれば、慷慨

高山正之は（主語）上野の人なり（述語）

書を（客語）讀む（述語）讀レ書。

眼光は（主語）人を（客語）射る（述語）眼光射レ人。

文學の士に（補部）交る（述語）

高山正之、上野人也。

して己與に時を同じくして其の事に關せるが如し。」少くして平安に入り、三條橋東に至り、皇居は何れの方ぞ」と問ひ、人之を指示せしかば、卽ち地に坐して拜跪して曰く、「草莽の臣正之」と。行路聚り觀て、怪み笑へども顧みざるなり。「京郊に遊び、足利高氏の墓に過り、其の罪惡を數めて大に罵り、之を鞭つこと三百なりき。」

〔摘解〕字＝支那では人の實名を呼ぶを以て不敬とし、別に平常の呼び名を稱へて、之を字といふ。我が國でも、漢學の傳來と共に、此の字が行はれるやうになつた。○俊異＝人並すぐれたること。○喜＝「このむ」とよむ。◎好と同じ。○通ニ大義一＝おほよその意味を知ること。「大義」は「大意」といふこと。「大義名分」といふときの「大義」は「君臣の大義」であつて、ここの「大義」とは

交二文學之士一。
人(主語)孝子義僕の事を(客部)說く(述語)
人說二孝子義僕事一。
之を(客語)人に(補語)述ぶ(述語)
述二之於人一。

其の意味が別である。○白皙＝色の白いこと。皙は「皮膚の色の白い」といふ意味の字である。此の字は「哲」の字と似ては居るが、少しく注意をすれば、誤るやうなことはない。○精悍＝いさましきこと。かひがひしきこと。○奇節＝すぐれたるおこなひ。○輒＝この「すなはち」は、「そのたびごとに」とか「たやすく」とかいふ意味のときに用ゐる字。○往＝この「ゆく」は「復」「返」「來」等と對して、「往復」「往返」「往來」等となる字で、「先方へゆく」とか、「あてをつけてゆく」とかいふ意味である。故に「止まる」の反對で「あるく」といふ意味のある「行く」の字とはちがふのである。○轉＝他へ移すこと。○殷殷＝憂ふるさま。○慷慨＝心が激昂して憤りなげくこと。○草莽臣＝官に仕へずして地方に在るもの。民間に在る臣。○京郊＝京都の郊外。「郊」は「まち

己(主語)與に(修飾)時を(客語)同じくす(述語)
己與同レ時。
己(主語)與に時を同じくして(修飾)其の事に(補部)關す(述語)
己與同レ時關二其事一。

はづれ」といふ字。○數＝その罪を數へあげて責むること。

〔通釋〕高山正之は上野國の人である。正之は字を彦九郎といひ、其の家は世々農を業として居る。正之は生れつきが人並すぐれた人で、好んで書物を讀み、書中の大意は大概之を解して居た。此の人は皮膚の色が白くて、勇ましい性質の人であつて、眼の光するどくして射るが如く、其の聲は鐘の鳴るが如く大きかつた。世にもすぐれたる行のある人であつた。』此の人は好んで學者と交際をして居た。父母に事へて孝行なる子供のはなしや、主君に事へて忠義なる臣僕のはなしをして聽かする人のあることを耳にするときは、縱ひ遠い處であらうとも、何時でも其處まで出かけて往いて其の事を問ひただし、尙ほ自ら其の聽いた孝子義僕の事柄を他の人々へも移し傳へ、之を話

してきかせた。其の之を述べ傳ふることをする時には、孝子義僕の志をあはれみ、其の身の上に同情し、其の忠孝の行に感ずることの深きがために、湧き出づる涙は、語る聲に隨つて墮ちてくる。さてまた古より今に至るまでの、君臣の事跡、その順逆如何といふことを談ずるときには、正之の心は激しく興奮して來て、己も亦その人々と同時に生れあひて、共に其の事に關係して居るのだと思うて居るかのやうに見えた。』正之は年わかい頃に京師に入り、三條橋の東に至つて、「皇居は何方であるか」と人にたづね、人が皇居を指して知らせたところが、直ちに地に坐つて、ひざまつきて拜禮して、「民間の臣正之でございます」と、はるかに申上げた。途上を往來する人々が聚り視て、怪みて笑ふけれども、正之は其れには頓着しなかつた。』京都の郊外に遊んだときには、足利高氏の墓に立ちより、高氏の罪惡を數へ上げ責めたてて大に罵り。其の墓を鞭つこと三百度にも及んだ。』

（修）平安に　（補語）入る　（述語）少し入二平安一。

皇居は（主語）何れの方ぞ（述語）皇居何方。

皇居は何れの方ぞと（補部）問ふ（述語）

問二皇居何方一。

（主部）之を（客部）指示す（述語）入レ指二示之一。

行路（主語）聚り觀る（述語）行路聚觀

行路聚り觀て怪み笑へども（修飾）顧みざるなり

格言

○子曰ク、君子之於二天下一也、無レ適也。無レ莫也。義之與レ比。（論語、里仁）

○子曰く、君子の天下に於けるや、適も無きなり。莫も無きなり。義と之れ與に比む。

〔摘解〕於二天下一也＝天下に於いて何事をするにも。○適＝是非とも之をしようとする事柄。○莫＝は適の反對で、「どうしても之をしないと思ふ事柄」をいふ。○比＝は「したしむ」と訓みて、親と同じ。朱子の註には「從也」と

（述語）行路緊觀怪笑、不レ顧也。

少くして（修飾）平安に（補語）入る（述語）少入二平安一。

高氏の罪惡を（客語）數む（述語）數二高氏罪惡一。

してある。

〔通釋〕凡そ君子といはれる人が、天下に於いて何事かを爲ようとするに、此の事は是非とも之を爲ようと思うて其れを爲ることもないが、これはどこまでも爲ぬと最初から決めて居る事も亦ない。事柄を主として一身の利害損得の上より打算するやうでは、過を生じ易いものだから、君子は事柄に著目しないで、義といふ點に重きをおいて行うてゆく可きものである。と孔子が曰はれた。

○曾子曰、可三以託二六尺之孤一、可三以寄二百里之命一、臨二大節一而不レ可レ奪也、君子人與。君子人也。（論語、泰伯）

○曾子曰く、以て六尺の孤を託す可く、以て百里の命を寄す可く、大節に臨

（主語）無し（述語）無レ適。

（主語）無し（述語）無レ莫。

有りとか無しとか多しとか少しとかいふやうな述語は、主語の上にあるのが、あたりまへである。

んで奪ふ可からざるや、君子の人か。君子の人なり。

〔摘解〕託＝たのむこと。委任すること。○六尺之孤＝十五六歳のみなしご。「二歳半を一尺」としてあるから、六尺は丁度十五歳に當る。○寄＝もまた託と同じ。委任すること。○百里之命＝とは、「諸侯の國の政治」をいふ。方百里は諸侯の國。政を行ふには命令を發するから、「政」を「命」といふのである。○大節＝は「大なる事柄」といふこと。大事件。○不レ可レ奪＝とは、「奪ふ可からざる氣節のある」をいふ。○與＝は、ここでは、下の句を強めんがために、疑問として用ゐたのである。

〔通釋〕曾子が曰はれるに、「爰に人があつて、其の人は、十五六歳の幼孤を委せおくに足るだけの義心ある人であり、諸侯の國政を委任するに足るだけ

の才幹ある人であり、大事件に遭遇し、危難に處して、奪ふ可からざる氣節のある人であつたらば、之を稱して『彼の人は君子だ』というてよからうか。いよいよ『彼の人は君子だ』というてよからう」と。是れは曾子が、同門の子路といふ人をほめて曰はれたのである。

（附說）加藤清正は終身この一章を誦した人であると聞くが、清正は自ら能く之を實行して居られる。乃ち「可以託六尺之孤」は、幼君秀賴公を輔佐せられたるに當り、「可以寄百里之命」は、肥後侯となつて其の國を治め、水利を興して領民を悅服せしめられたるに當り、「臨大節而不可奪」は、秀賴公が招かれて、家康公の所に往かれる時に、匕首を懷にして秀賴公を守護せられたるに當るであらう。清正終生の事業は、實に此の一章にありと謂ふべきである。

○子貢問曰、何如斯可レ謂二之士一矣。子曰、行レ己有レ恥。使二於四方一不レ辱二君命一可レ謂レ士矣。（論語、子路）

六尺の孤を（客部）	可三以託二六尺之孤一
託す（述語）	百里の命を（客部）
託二六尺之孤一。	寄す（述語）
○可以託るは「託す」ことをなす可し」といふ意味ほどの意味に用ゐられたる字。	寄二百里之命一。
六尺の孤を（客部）	百里の命を（客部）
託することを◎なす可し（述語）	寄することを◎なす可し（述語）
	可三以寄二百里之命一。

○子貢問うて曰く、「如何なるを、斯れ之を士と謂ふ可き」と。子曰く、「己を行うて恥あり。四方に使して君命を辱めざるは、士と謂ふ可し」と。

〔摘解〕斯＝は「此」と同じく用ゐる字であるが、ここでは口調をく輔るために用ゐてあるのだ。○士＝ここでは「君に仕へて國家の事を行ふに足る者」をいふ。○有レ恥＝は「廉恥の心あり」と動詞ともなり、「はづかしめ」といふ名詞ともなるが、此の字は「他に對するはづかしめ」にいふのである。「恥」は「おのれの心にはぢ尤むる」にいひ、「おのれの心のはぢ尤め」にいふ字である。

〔通釋〕子貢が孔子に問うて、「どのやうな人物であつたらば、君に仕へて其の國事を行ふに足るだけの者だと申されませうか。」というた。孔子は之に答

大節に(補語)臨む(述語)臨大節
奪ふ可からず 1 2 3
不可奪 1 2 3
其の志を(客部)奪ふ可からず(述語)不レ可レ奪二其志一。
之を(客語)士と(補語)謂ふ可し(述語)可レ謂二之士一。
己を(客語)行ふ(述語)行己有レ恥。(主語)有レ恥。(述語)
己を行うて(修飾語)恥有り(主語)行己有レ恥。(述語)
四方に(補語)

へて、「自ら事を行ふにあたりて、若し其れが義にかなはぬやうであるならば、己が心にはぢ尤めて、深く自ら戒むるだけの氣節ある人であり、君命を帶びて四方の國に使した場合には、能く其の任務を完うして、之を辱めぬだけの才識手腕のある人であつたらば、之を稱して「士である」といふことが出來る」といはれた。つまり「氣節と才能との兩方共に具はつて居る人物を士と謂ふべし。」と答へられたのである。

孔子曰、有レ德者必有レ言。有レ言者不二必有一レ德。仁者必有レ勇。勇者不二必有一レ仁。（論語、憲問）

○子曰く、德あるものは必ず言あり、言あるもの必ずしも德あらず。仁者は必ず勇あり。勇者必ずしも仁ならず。

〔摘解〕有レ言＝善いことをいふ。善言がある。○不二必有一レ德＝かならず德があるとは限らない。德の有ることもあるし、德の無いこともある。「必不レ有レ德」と書くときは、「德が無いにきまつて居る」といふ意味になる。

〔通釋〕孔子が次のやうに曰はれた。其の心に德のある者は、　の口より發する言說は必ず善いものである。然れども、善いことを言ふからとて、其の人に德があると限つたことはない。口先ばかりを上手にして、心にないことを言ふのであるかも知れぬ。仁者は私慾に制せられて己を枉ぐることが無いからして、義を見ては必ず之を行ふほどの勇氣がある。然れども、勇氣があるからとて、其の心に仁のある人だと限つては居ない。其の勇氣は偶血氣にまかせて發したる一時的小勇であるかも知れぬ。

次に簡單なる國文を揭げ、之を漢文と對照して、漢文の組織に關することを少しく說いて見よう。

「まとまりたるかんがへ」即ち「完全なる思想」を表はすものを文といふ。文はそれを組立つる成分の上からいへば、次の如く四とほりの種類がある。

一　(イ)花咲く。　(ロ)月清し。

右の(イ)と(ロ)とは、極めて短くはあるけれども、思想がまとまつて、意味がよく分つてをるからして、即ちこれは文である。而して(イ)の「花」といふ語と(ロ)の「月」といふ語とは、思想の主となつて居るからして、これを主語といひ、又(イ)の「咲く」と(ロ)の「清し」とは、主語に就いて其の動作や形容を述べて居るからして、これを述語といふ。前の二つの文は主語と述語とだけで出來て居

使す(述語)
使二於四方一。

君命を(客語)
辱めず(述語)
不レ辱二君命一。

四方に使して(修飾)君命を(客語)辱めず(述語)
使二於四方一不レ辱二君命一。

德(主語)有り
(述語)有レ德。

言(主語)有り
(述語)有レ言

德ある者は(文主)必ず(修飾)言(主語)有り(述語)
有レ德者必有レ言。

不必=であるとは限らない。どちらか分らぬ。

るので、これが文の最も簡單なものである。文には少くとも主語と述語とが無くてはならぬ。(イ)と(ロ)とを漢文になほすときは、

(イ)花咲。　(ロ)月清。

となり、たゞ假名を除いたばかりであつて、語の順序はかはらない。

二　(イ)彼は讀む。　(ロ)小兒は捕ふ。

この例において、(イ)の「彼」と(ロ)の「小兒」とは主語であつて、(イ)の「讀む」と(ロ)の「捕ふ」とは「述語」である。そこで此の(イ)(ロ)共に主語と述語とだけは含んでをるけれども、其の讀まるゝものは何であるか、捕へらるゝものは何であるかといふことが知れなければ、未だ完全なる思想は表はれて居ない。故にその「讀まるゝもの」又は「捕へらるゝもの」を加へて

不必＝きつと然樣ではない。さうでないにきまつてゐる。
必ずしも德あらず。不二必有レ德。
必ず德あらず。必不レ有レ德。

（イ）彼は書を讀む。（ロ）小兒は蟬を捕ふ。

とすれば、始めて思想がまとまつて來て、意味がよくわかるのである。この「書を」又は「蟬を」といふやうに、述語のはたらきを受くる語を名づけて客語といふ。前の二文を漢文になほすときは、

（イ）彼讀レ書。（ロ）小兒捕レ蟬。

となつて、國文の形式とは、客語述語の順序が反對になるのである。

三（イ）少女似る。（ロ）壯丁爲る。

右の（イ）（ロ）もまた「少女」といひ「壯丁」といふ主語と、「似る」といひ「爲る」といふ述語とをそなへて居るけれども、何に似るかをいひ、何となるかをいはなければ、未だ其の思想がまとまらない。今その何に又は何といふ語を加へて、

（イ）少女、母に似る。（ロ）壯丁、兵士と爲る。

とすれば、其の意味が始めて完全になる。かくの如く、述語に對して其の標準となる語、即ち「母に」又は「兵士と」などは、これを名づけて補語といふ。前の二文を漢文になほすときは、

（イ）少女似レ母。（ロ）壯丁爲二兵士一。

となつて、これも亦國文の形式とはちがひ、補語、述語の順序が國文と反對になつて居る。

（二）の文と（三）の文とは、一見しては少しも異つたところが無いやうであるけれども、（二）の例に於ける客語と（三）の例に於ける補語とは、其のもむきに區別があつて、決してこれを同一に視ることは出來ぬ。即ち客語

は述語の動作を受けて其の目的となり、補語は述語に對して其の標準となるのである。

四　(イ)父は給與す、　(ロ)志士は盡す。

(二)(三)の例にもいへる如く、こゝの(イ)も(ロ)も共に主語と述語とは有るけれども、(イ)に於ける父は何を給與するのであるか、(ロ)に於ける志士は何を盡すのであるか、未だそれは分らぬ。故にその何をといふ語即ち客語を加へて

(イ)父は學資を給與す。　(ロ)志士は力を盡す。

とすれば、其の意味が餘程わかるやうになつて來るが、しかし精密に考へて見ると、尙ほ未だ十分でない所がある。なぜかといへば、其の學資を誰に給與するか、其の力を何に盡すか、それが未だ分らぬからである。故にその誰に又は何にといふ語即ち補語を加へて、

(イ)父は學資を其の子に給與す。

(ロ)志士は力を國家に盡す。

とすれば、始めて完全なる思想を表はす文となるのである。この二文を漢文になほすときは

(イ)父給二與學資於其子一。(ロ)志士盡二力於國家一。

となつて、やはり國文とは語の順序がちがふのである。而して又國文の「其の子に」は「於二其子一」となり、「國家に」は「於二國家一」となつて、に或はよりの如き、國文の謂はゆる助詞に相當する語、即ち於とか、乎とかの如き語は、漢文にては補語の上に置かるゝのであるからして、之に「前置詞」といふ名がつけて

ある。この前置詞を添ふるには、文の意味を明かにするための場合もあり、又は語調をよくするための場合もあるが、其の用ゐかたの細やかなる所に至つては、他日長い文を研究する時に、よく味ふことにしよう。

以上述べた事を引きくるめてみると、次のやうになるのである。

國文

(一)主語—述語。

(二)主語—客語—述語。

(三)主語—補語—述語。

(四)主語—客語—補語—述語。

漢文

(一)主語—述語。

(二)主語—述語—客語。

(三)主語—述語—補語。

(四)主語—述語—客語—補語。

右の四種は、單純なる文例に過ぎないので、其の成分たる主語・述語・客語・補語・などには、それを修飾する語句が加へられて主部・述部・客部・補部などゝなり、斯くして次第に長い複雑なる文が出來るのである。又その成文を省いても意味の通ずる場合には、之を省くことも少からず、或は語聲の都合からして、成分の位置を取りかふることも亦多いのであるが、これらの事は研究の漸く進むにつれて、おのづから會得せらるゝであらう。兎も角も漢文を讀むには、其

(四)においては、國文にても、漢文にても、客語と補語との位置を取りかへて、次のやうにしてもよいのである。

〔國〕父は其の子に學資を給與す。
主語—補語—述語—客語。

語―客語―述語。
〔漢〕父給ニ與ス其子ニ學資ヲ。
主語―述語―補語―客語。

の文を組立つる成分の位置を、常に國文に於ける成分の位置と引きあはせて研究して行くことを忘れてはならぬ。次に一つ前に擧げた例よりは少しく長い文を出して、成分の順序がどのやうになつて居るかといふことを說き、文の組立に關するはなしは、是れにてやめておくことにしよう。

○淺見絅齋、兼好ニ武事ヲ、常騎レ馬擊レ劒ヲ。其所レ帶劒鐔ニ、鐫ニ觀瀾篆赤心報國四字ヲ。

(○)は句點といふ。或は(丶)を附することもあるが、それは讀點といふ。又は小讀點とて(●)を用ゐるところもある。(一)(二)(レ)などを返點といふ。これは國語のとほりに漢文をよむに、その順序を示すためにするのである。(ハ)(ヲ)(テ)(ミ)(ヲ)(ニ)などのやうに、漢字のかたはらに附するを送假名といひ、又は捨假名ともいふ。句點と讀點とを合せて、これを句讀といひ、返點と送假名とを合せて訓點といふ。

國語では(丶)と(○)とを使ひわけて、文の意味を明かにして行くけれども、漢文では從來のとほり(○)だけを今日でも用ゐて居るからして、やはり其のとほりに從つておかう。而して右の漢文を、その句讀訓點を附せれたるとほりにして、書きくだしにするときは、次のやうになるのである。(ツイデニ讀ミカタマデ附ケテオク)

○淺見絅齋は兼ねて武事を好み、常に馬に騎り劒を擊つ。其の帶ぶる所の劒鐔には、觀瀾の篆せる赤心報國の四字を鐫りき。

この文を假りに短く切りはなしてみると、次のやうになる。

1. 淺見絅齋。兼好ニ武事ヲ。
2. (淺見絅齋)。常騎レ馬擊レ劒ヲ。

3.（淺見絅齋。）其所レ帶劒鐔。鐫ニ觀瀾篆赤心報國四字一。

1.の「淺見絅齋」は「主語」で、「好む」は「述語」、「武事を」は「客語」であることは、前の例に照らして直に知らねばならぬ。「兼ねて」は「好む」といふ述語に副うて其れを修飾して居るから、このやうな語を「修飾語」といふ。そこで今「好む」といふ述語と、其の修飾語たる「兼ねて」とを合せて、これを「述部」といふ。これと同時に、主語と其の修飾語とを合せて「主部」といふこと、客語や補語と其の修飾語とを合せて「客部」といひ「補部」といふことも亦承知しておかねばならぬ。以上のことを、取りまとめていへば、次のやうになる

淺見絅齋（主語）兼好（述部）武事（客語）

2.は前後の關係からして、主語を入るれば「淺見絅齋」であることがわかる。「騎り」は「馬に」といふ補語に對する述語であり、「擊つ」は「劒を」といふ客語に對する述語であることは、前例に照らして承知せねばならぬ。「常に」は「馬に騎り、又は劒を擊つ」に副うて、其れを修飾するから即ち修飾語である。馬に騎つたり劒を擊つたりする人は淺見絅齋であるから、そこで「馬に騎り劒を擊つ」は「淺見絅齋」といふ主語に對する「述部」であり、其れに「常に」といふ修飾語が加はつて同じく「述部」をなすのである。取りまとめて示せば次のとほりである。

（淺見絅齋）（主語）常騎レ馬擊レ劒（述部）

3.の主語も「淺見絅齋」であることは2.と同樣である。「劒鐔には」は補語であ

り「赤心報國の四字を」は客語であり、「鐫りき」は述語である。「其の帶ぶる所の」は「劒鐔」の修飾語であつて、「觀瀾の篆せる」は「赤心報國の四字」の修飾語であつてみれば、其の位置が前例に擧げたのとちがふのは如何なるわけかといふに、この3は、同樣の意味で以て、次のやうに書きかふることも出來るからである。

（淺見絅齋）鐫ニ觀瀾篆赤心報國四字於其所レ帶劒鐔ニ。

このやうにして、補語の位置をかへて、前例（四）に擧げたのと同樣の順序にすれば、語勢の工合は（淺見絅齋）其所レ帶劒鐔鐫ニ觀瀾篆赤心報國四字ヲ。と書いたのとちがふけれども、其の意味はちがはない。故に「劒鐔」が補語であることは疑のないのである。そこで之を分解すると、次のやうになる。

（淺見絅齋）其所レ帶鐔劒ニ（補部）鐫ニ（述語）觀瀾篆赤心報國四字ヲ（客部）

右のやうなわけで、一の長い文の中には、多くの短い文が含まれて居つて、其の間に於ては、或成分を省いても、其の前後の工合からして、推して意の通ずる所がある。そのやうな所では、其の成分は省かるゝ場合が多い。それは前にも述べたとほりである。

さて是れから愈〻漢文の講讀に取りかゝるのであるが、ついでに前の文も一と通ほり講義しておかう。

〔摘解〕鐔＝はツバとよむ○篆＝は書體の一種である「篆す」とか「篆せる」とかのやうに動詞にすれば、「篆書の體で書く」といふ意味となる○赤心報國＝の赤心は「イツハリノナイ心。マゴコロ」といふことで丹心と書いても同じ意味であ

る。赤も丹も「アカ色」といふ意味の字であるが、アカ色は火と同じ色で、火は熱いもの、勢の盛なるものであるから、人が僞りも飾りもせずに、唯ひとすぢのマゴコロをふるひ起して行くにたとへて、そこで其の赤又は丹といふ字が誠といふ意味に用ゐらるゝのであらう。一心になつて勉強することを「丹誠をこらす」などいふも亦同じ意味である。報國はクニノ恩ニムクユといふ意味である、故に「赤心報國」は「マゴコロヲ盡シテ國恩ニ報ユ」といふ意味である。

〔通釋〕淺見絅齋といふ人は、學問が能く出來て、併せて又武藝が好きで、平生馬に騎つたり擊劍をしたりして居つた。この人は其の腰に佩してをる刀のツバには、觀瀾といふ人が篆書でかいた「赤心報國」といふ四字をホリツケて居つた。

遺金

○或遺ニ金七百圓於途一。乃託ニ新聞社一。募ニ拾者一曰。當ニ謝以ニ一百金一。有レ人拾レ之來報。遺失者俄詣曰。我金本有ニ八百一。今唯七百。是子既私ニ一百一也。拾者怒。訴ニ之官一。官吏一瞥知ニ其僞一。判曰。遺金本有ニ八百一。而拾者即曰ニ七百一。是別有レ遺、七百金一者上也。若至ニ他日一。無レ有ニ其人一。則當ニ照ニ法規一爲レ拾者之有。若下其遺ニ失八百金一者上。則姑待ニ後報一。

○或人金七百圓を途に遺す。乃ち新聞社に託し、拾ひし者を募りて曰く、「當に謝するに一百金を以てすべし」と。人あり之を拾ひて來り報ず。遺失せし者俄に詣きて曰く「我が金は本八百圓ありき。今は唯七百圓のみ。是れ子既

法規―法度　立願―立憲　甲乙―甲冑　合同―合體。　納涼―納

に一百を私せるなり」と。拾ひし者怒り、之を官を訴ふ。官吏一瞥して其の僞たるを知り、判して曰く、「遺失せし者は言ふ。『金は本八百なりき』と。而して拾ひし者は即ち七百なりと曰ふ。是れ別に七百金を遺しゝ者あるなり。若し他日に至りて、其の人あることなくば、當に法規に照して拾ひし者の有とすべし。其の八百金を遺失せし者の如きは、姑く後報を待て」と。

〔摘解〕遺＝はオトス、ウシナフ、などとよむ。○當＝はマサニと一たび讀み、更にベシと繰り返りかへして讀む字である。唯「ベシ」とばかり讀んでもよいのであるけれども、國語で「ベシ」と讀む字はこの「當」ばかりでなく、「宜」「須」「可」など、ほかにもまだ多くあるから、其れらを讀みわけていくために「當ニ…ベシ」とか「宜ク…ベシ」とかいふやうに二度よむのである。「當」の「ベシ」は「サウスルハズデアル」とか「サウスルノガ當然デアル」とかいふ意味である。○詒＝は音タイで、紿ト同ジク「アザムク」といふ字。○瞥＝は「チラリト見エ」たり、「チラリト見たりすることをあらはす字。○僞＝の音はギである。この字は「信」の反對である。「信」は人と言とを合せて作つた字であつて、「人ガ其ノ本心ノママニ發スルコトバ」は「マコト」である、といふ意味からして「マコト」といふ字である。「僞」は人と爲とを合せて作られた字であつて、「人ガ爲リゴトヲシテ其レヲ外ニ發スル」のであるからして、「イツハリ」といふ意味となるのである。

得十人―十色。などの如く、促音のときに「つ」となるものが、長音となるときは、其の假名は「ふ」である。○瞥の字の上の部分は敝といふ字で敝といふ字ではないのであるが、この敝と敝とは餘程よ

〔通釋〕或人が金七百圓を途中におとした。そこで其の人は新聞社にたのんで、廣く其の金を拾うた者をたづね求め、「其の金を拾うてゐて、それを持つ

く似た所のある字だから、氣をつければならぬ。敝は俐と支とを合せた字で、敝は尙と支とを合せた字である。俐のある方は音がヘイで、尙のある方は音がシヤウである「例へば蔽敝のやうなものだ。○乃も卽も則も皆「スナハチ」と讀むけれど

て來てくれた人には、屹度金一百圓を御禮として呈します」というた。然るに或人が其の金を拾うて其の遺した人の許に來て、それを知らせた。すると其の遺し主は、急に心がはりがして拾うた人にうそをいひかけ、「私の遺した金は本八百圓であつた。それに今は七百圓だけより無い。是れは子がはや一百圓だけを御自分で取つてしまはれたからである」というた。それ故に拾うた者は腹を立てゝ此の事を役所に訴へ出た。とりしらべの官吏は一と目ちらりと見たばかりで、直に遺した者の言ふことが僞であると知つて、判決を下し「遺した者は『金額はもと八百圓であつた』といふ。しかるに拾うた者は『七百圓である』といふ。してみると、是れは別に誰か金七百圓を遺した者があるのである。若し後日に至つて、七百圓の金額を遺したといふ者が出て來

も、意味にはそれぞれちがひがある。乃は上文を受けて「ソコデ」といふ意味となり、卽は「卽刻」とか「トリモナホサズ」とかいふ場合に用ゐられ、則は我が國語の「ハ」とか「バ」とかいふ助詞と同じ意味に用ゐらるゝのである。

ることが無いならば、其の時には當然法令規則に照しあはせた上で、七百圓の金額はこれを拾うた者の所得とすべきものである。八百圓の金を遺失したなどゝいふやうな、そんな者は、しばらく後日のしらせを待つて居よ」といはれた。

森蘭丸

○森蘭丸嘗奉織田信長刀在側。刀鞘黑漆。有款紋數十條。蘭丸潛料記其數。信長覷知之。而不言也。居數日。集左右近臣。撫其刀謂之曰。有能暗射鞘上款數者。乃與此刀。衆爭射之。不能中也。蘭丸獨默不言。信長問。汝何故不射之。蘭丸謹對曰。臣嘗料記其數矣。今如爲不知者

而中レ之。是賣二主公一以貪二其賜一也。臣心所二深恥一。是以不レ敢。信長悦ニ其誠懇一不レ欺。賜以二其刀一。

○森蘭丸、嘗て織田信長の刀を奉じて側に在り。刀鞘黒漆にして、款紋數十條あり。蘭丸潜に料りて其の數を記せり。信長之を覘ひ知れども、而も言はず。居ること數日、左右の近臣を集め、其の刀を撫でて之に謂ひて曰く、能く鞘上の款數を暗射する者あらば、乃ち此の刀を與へんと。衆爭ひて之を射れども、中つること能はず。蘭丸獨り默して言はず。信長問ふ、汝何が故に之を射ざるかと。蘭丸謹みて對へて曰く、臣嘗て料りて其の數を記せり。今如し知らざる者の爲して之を中てなば、是れ主公を賣りて以て其の賜を貪るなり。臣、心に深く恥づる所なり。是を以て敢てせずと。信長其の誠懇にして欺かざるを悦び、賜ふに其の刀を以てせり。

〔摘解〕刀鞘＝刀の室。○款紋＝刻ミ鞘ノ模樣のこと。○條＝スヂ。○記＝心ニオボエコムこと。記憶することガヒ視ルといふ意味がある。○覘＝この字の音はシヨである。ウカく方が正しい。○不レ射＝は射ラズとしてはあやまりである。動詞活用の上からいへば「上一段活用」であるから射ズとせねばならぬ。○賣＝ハ賣買とか販賣とかいふやうに用ゐる字であるから、やはりウルとよむけれども、この文では賣を欺くといふ意味に用ゐたので、「主公を賣りて」といへば、其の「賣りて」は「ダマシテ」とか「ダシヌイテ」とかいふやうな意味となるのである。○敢不＝の敢は思ヒキツテスルと意味をあらはす。遠慮セヌことである。

射は、名詞のときはシヤといふ音であるけれども、動詞として用ゐるときはセキといふ音である。「暗射」とは、物を見ずして「そらでつること」をいふ。

漆の字は柰の字と同じ音で、同じ意味に用ゐたのである。ウルシ

勇敢、果敢などの敢もやはり同じ意味である。故に不敢といへばスルコトヲ思ヒキラナイ、遠慮シテ居テシナイ、サシヒカヘテ居テシナイといふ意味となるのだ。もし又敢不と書くときは前と反對で、シナイコトヲ張リトホス、強情デアツテシナイ、頑固ニシテ爲ヌといふ意味となるのだ。或は「敢ヘテセザランヤ」というて、スルの反語として用ゐる場合もある。○誠慤＝の慤は謹とか誠とかいふ字と同じ意味で、スナホとかマコトとかよむ字である。故に誠慤の二字でマコトといふ意味になるのだ。

〔通釋〕森蘭丸が、いつぞや織田信長の刀を兩手で恭しく持つて、信長のそばに居た。其の刀の鞘は黑ぬりであつて、刻まれたる模樣が四、五十すぢほどもあつた。蘭丸は人しれず其の數をかぞへて、其れを記憶してゐた。信長

とよむ。柰を分解すれば木八氷となる。八は木の皮に刀を以てきずをつけたるかたち、氷は其の切口から滴る水である。そこで木八氷の三を合はせてウルシといふ意味の字となるのだ。故にウルシといふ字を漆と書くはまちがひであることが分

は此のことをうかがひ視て知つては居られたが、それでも默つて言はれなかつた。其れから日數のたつこと四、五日の後に、信長は御そばづきの家來を集め、其の刀を撫でて家來たちに話をして、「この鞘の上に刻まれてある模樣の數を、ソラで言ひあつることの出來る者があつたならば、乃ち其の者に此の刀を與へよう」といはれた。すると其の家來たちは爭うて其の數を言うてみるけれども、なか〳〵言ひあつることが出來ない。時に蘭丸だけは默つてゐて何も言はない。そこで信長は蘭丸に問うて、「おまへはどういふわけで模樣の數をあてようとはしないか」といはれた。蘭丸は謹みて其の問に對へて「ワタクシはマヘカタ其の數をかぞへまして、記憶して居ります。それを今もし知らぬふりして、之を言ひあてませうものならば、是れ主公をダシヌイ

て而して其のタマモノをむさぼり取ることになりまする。これはワタクシの心に深く恥しいとおもふ所でありまする。それゆゑにワタクシは遠慮を致しました」と申し上げた。信長は、蘭丸の心のマコトにして欺かないのを悦ばれ、其の刀を蘭丸に下された。

劫賊改心

○伊藤仁齋嘗夜行郊外。劫賊四五人當路立。各按劍曰。吾徒不醉不樂。今無酒資。客若缺腰纏。則自脫衣裳供之。仁齋神色不少動曰。今日適無囊錢。敝縕袍脫以遺之耳。且問。汝輩常以何爲業邪。曰。昏夜橫行。掠奪以自給。是其業也。仁齋曰。以若所爲爲業。吾何拒焉。輒脫服以授之

る。この柰は正しい字で、漆はまちがひであることを、よく記憶しておかねばならぬ。○款の字を欵と書いたのは俗字であつて、款の方が正しい。○衆の本字は庶であつて、下の方は人といふ字を三ツ並べて書いてある。故に下の方を豕といふ字のやうに書くのは可

笑しい。これも注意せねばならぬ。○謹といふ字は言と菫とを合せて出來て居る。菫の音はキンで、スミレとよむ。僅謹饉などは、何れも菫の音である。だから僅謹饉などと書いてはあやまりである。○嘗はナムとかコヽロムとかのよみかたもある字

將去。於是賊止仁齋曰。吾儕草竊爲衣食數年。未嘗見擧止如客者。抑客何爲者。曰。儒者也。曰。儒者爲何事。曰以人道教人者也。所謂人道者。孝於親。弟於兄。不可一日無者是也。人而無道。禽獸焉耳。言未畢。賊皆頓首涕泣曰。噫。君與吾均是人也。而事業之迥異如是。吾甚恥。願君宥吾儕罪。今而後。飲灰洗胃。謹奉教于門下。遂皆改心自勵云。

○伊藤仁齋、嘗て夜郊外を行く。劫賊四五人、路に當りて立ち、各々劍を按じて曰く「吾が徒は、醉はざれば樂まず。今、酒資なし。客、若し腰纏を缺かば、自ら衣裳を脫して之を供せよ」と。仁齋、神色少しも動かずして曰く「今日適、囊錢なし、敝れたる縕袍をば、脫して以て之を遺らんのみ。且問ふ、汝が輩は常に何を以て業とするか」と。曰く、「昏夜に橫行し、掠奪して以

で、尙と旨とより出來て居り、尙の方で音が出るから、シヤウである。嘗と書くは俗字である。○賜は貝と易とを合せた字で、易と昜とは別字であるから、昜と書き誤つてはならぬ。○恥の字も耻と書く方が俗字である。

て自ら給す。是れ其の業なり」と。仁齋曰く「かくのごとき所爲を以て業とせば、吾何ぞ拒まん」と。輒ち服を脱して以て之に授け、將に去らんとす。是に於て、賊、仁齋を止めて曰く、「吾が儕草竊して衣食を爲すこと數年なれども、未だ嘗て、擧止、客の如き者を見ず。抑客は何爲る者ぞ」と。曰く「儒者なり」と。曰く「儒者は何事をするか」と。曰く「人道を以て人に敎ふる者なり。謂はゆる人道とは、親に孝に、兄に弟に、一日も無かる可からざる者、是れなり。人にして道なきは、禽獸なるのみ」と。言未だ畢らざるに、賊皆頓首し涕泣して曰く、「噫、君と吾とは、均しく是れ人なり。而るに事業の遙に異れること是の如し。吾、甚だ恥づ。願はくば君、吾が儕の罪を宥せ。今よりして後、灰を飮みて胃を洗ひ、謹みて敎を門下に奉ぜん」と。遂に皆

若の字はゴトシとよむ場合が多いけれども、こゝではカクノゴトシとよむ。如此と二字かいたのと同じやうに用ゐてあるのだ。

心を改めて自ら勵みきと云ふ。

〔摘解〕劫賊＝追剝のこと。劫はオビヤカスとよむ。○按ㇾ劒＝刀の欛に手をかくること。○腰纏＝腰はコシとよみ、纏はマトフとよむ。腰纏とはコシニツケタルモノ即ち財布のことをいうたのである。昔、或處で、人が數人集まりあうて、各〻其の希望をのべたときに、其の中の一人は「地方長官になりたい」といひ、一人は「財産家になりたい」と云ひ、一人は「仙人になりたい」と云ひ一人は「腰纏十萬貫といふやうな財産家ともなり、仙人ともなり、地方長官ともなりたい」と云うたと書いたものがあるが、財布のことを腰纏といふことは、それから出たのだ。○神色＝精神と顏色と。○縕袍＝綿入。○遺＝こゝでは贈の意味に用ゐてあるから、オクルとよむ。○横行＝キ

マヽニ押シアルク。○掠奪＝カスメウバフ。劫シテ取ル。○自給＝ミヅカラ供給ヲ取ル。○輒＝スナハチとよむ。タヤスクといふ意味。○將＝「マサニ…ントス」と二度よむ字。○草竊＝草野の竊盜。即ちオヒハギのこと。○未＝「イマダ…ズ」と二度くりかへしてよむ。「今日マデハ…デナイ」といふやうに、時を限りて否定する字であつて、不の全否定とは少しくちがふ。○儒者＝孔孟の傳へた道をならひおぼえて、其れを主義としてゆく人。○弟＝悌と同じ意味に用ゐるので、「兄ニ能ク從フコト」をいふ。○噫＝かなしみ痛むときに發する聲。この字をヨロコブトキ、ホムルトキなどに用ゐては當らぬ。○也の字は、文句のをはりに用ゐる字だから、終詞といふ。耳、邪、焉、矣、などもまた終詞である。而して也は決定の意味をあらはす終詞であるが、多くは、物事を説明するありさまの、やすらかにして、たしかなることを表はす。耳はソレバカリといふほどの意。邪は疑問をあらはす終詞。焉は決定を示す終詞であつて、矣もまた決定をあらはす終詞であるが、焉は矣よりも緩である。○輩も儕も同じくトモガラとよむ。輩はナカマといふこと、儕は相似タル者といふことである。或は儕輩として二字を續けて書くこともある。○而は而シテとよみて、單に上と上とを接續するだけに用ゐたるときもあり、又はシカレドモとかシカルニとかよみて、上と下と其の意味が相反することを示すに用ゐるときもある。其の用ゐかたの區別は、文の上と下とを讀んでみれば自らわかる。○飮灰洗胃＝は「心を入れかへて善い人となる」といふ意味であつて、飮灰は洗胃のためにするのである。○遂＝は「此の事から

して彼の事を成し遂げたる」意味だから、「ソレカラツヒニ」というてよい。

〔通釋〕伊藤仁齋と云ふ人が、いつか或夜にまちはづれの地をあるかれたとき、追剝の者どもが四五人、路のまんなかに立ち、めい〳〵刀の欄に手をかけて、「われらは酒が好きで、酔はなければ面白くないが、今その好きな酒を買ふだけの資がない。あなたは若し財布に入れた金錢の持ちあはせがないならば、みづから其の著てをる衣裳を脱いで、それをわたせ」というた。仁齋は、心も顔色も、少しもあわてた樣子がなく、おちつきはらつて、「今日はちやうど財布の中の持ちあはせがないから、此の敝れた綿入を脱いで、之をおまへたちにやらう。それよりほかはしやうがない。且つ自分はおまへたちに尋ねるが、おまへたちは平生いかなる事をしごととして居るのか」といはれた。追剝どもは之に對へて「夜中きまゝに押しあるき、人の物を劫して取つて、みづから供給をとることにしてゆくのが、是れがわれらのしごとである」といふうた。仁齋は「其の樣なしわざを以て業とするならば、自分はどうしておまへたちのいふことを拒まうか。否とはいはぬ」といはれ、著て居らるゝ服を脱いで、之を追剝どもに與へて。ちやうど去つてしまはうとせられた。そこで賊どもは仁齋を止めて、「私共は草野に伏して竊盜をはたらき、而して衣たり食うたりしてをることが、已に四、五年であるけれども、まだ是れまで、たちのふるまひのあなたのやうな人を見たことがない。そもそもあなたは、どんな人であるか」というた。仁齋は「われは儒者である」と答へられた。賊はなほも「儒者とは何事をするものであるか」と問うた。仁齋

戴の字は、孝と支とを合せた字であつて、この孝と孝とは同じでない。季はミチビクといふ意味である。それゆゑに孝と書くは俗字である。

は「儒者は、人々の行ふべき道を人に教ふる者である。其の世に謂ふ「道」といふ者は、親には孝行を盡し、兄には從順にして事ふる等のことをいふので、それは、たとひ一日たりとも、世に無くてはならぬものである。これが即ち今いふ「道」である。人にして此の「道」を知らないものは、禽獣も同様で、それと何の異つた所もないのだ」と答へられた。其の仁齋の言葉が未だ畢らないうちに、賊どもは皆あたまを下げて、なみだをこぼして泣いて、「あゝ。あなたとわれらとは、均しく是れ人間である。然るに其のするしごとの遠く異なつて居ることは是のとほりである。われらは甚しく心に恥しく思ひます。どうぞ君、われらの罪をゆるして下さい。今より以後は、全く心を改めかへて、謹みて教をあなたの御門下に受けたいと思ひます」といふた。それからしてつひに、皆心を改めて、自ら勉勵したといふことだ。

二　友

○俄國北鄙產大熊。多傷人。一日甲乙二友。約伴入山。猝遇大熊。乙力大。一躍越溪避之。甲不能躍。求救乙。乙不顧。奔一樹上。俯瞰之。甲無如何。一屛息仰臥。佯作死狀。熊反復嗅其頭面。良久而去。乙出樹下。反嘲甲曰。熊附君耳良久。殆與君密談耶。甲曰。誠然。熊告我曰。擇交宜愼。凡安樂則相親。患難則相棄者。勿與交也。

○俄國の北鄙に大熊を產す。多く人を傷く。一日甲乙二友、約伴して山に入りしに、猝に大熊に遇へり。乙は力大なり。一躍して溪を越えて之を避く。

甲は躍ること能はず。乙に援を求む。乙顧みず。一樹の上に奔りて、俯して之を瞰る。甲、如何ともすること無く、屏息し仰臥し、佯りて死せる狀を作す。熊、反復して其の頭面を嗅ぎ、良久しうして去れり。乙、樹下より出で、反りて甲を嘲りて曰く、「熊、君の耳に附くこと良久しかりき。殆ど君と密談せしか」と、甲曰く、「誠に然り。熊、我に告げて曰く、『交を擇ぶは宜しく愼むべし。凡そ安樂には相親み、患難には相棄つる者は、與に交ること勿れ』と。

〔摘解〕俄國＝露國のことである。支那では、露西亞といはずして俄羅斯といふ。○北鄙＝北方のカタ井ナカ。○約伴＝共につれだつ。○猝＝は「卒」と通ずる字であつて、「ニハカニ」とよむ。「ダシヌケニ」といふ意味である。○溪、＝「タニ」又は「タニガハ」と譯す。○瞰＝は「ミオロス」こと。○屏息＝イキヲ

○嗅は「カギ」と濁音に活用し、缺は「カキ」と清音に活用するのであるから、此の「ギ」と「キ」との區別に注意せねばならぬ

この文は、西洋の物語を譯したものである

越は走と戉とを合せて作つた字である。この字を越と書

コロス。○仰臥＝アヲムキに臥す。○佯＝は「イツハル」とよむ。内實はさうでなくして、外面だけそのマヂヲスルことである。○良久＝の良は「ヤヤ」とよむれども、稍、較などの「ヤヤ」とはちがつて居て、頗といふ意味である。故に「良久し」といへば「ヨホド久シイ」といふことである。○反＝は「タチモドル」とか「ウラガヘル」とかいふやうな意味の字である。○擇＝は音タクで、ヨシアシヲ選り分クルこと。○愼＝ヂンヲ入レテスルこと。○患難＝ウレヒクルシミ。

〔通釋〕露西亞の北方の片田舍には、大きな熊が居て、人を傷つくることが多い。そこに、或日のこと、甲某と乙某との二人の友だち同士が、共につれだちて山に入つたところが、不意に大きな熊に出遇つた。すると、乙は甲よ

いたり、越と書いたりするのは、皆あやまりである。戉はマサカリとよむ字で、音はエツであり、戊はツチノエといふ字で、音はボウであり、戌はマモルといふ字で、音はジユであり、戊はイヌといふ字で、音はジユツである。右の四字は各々別々の字であるから、其の字形は少しづゝちがつて居るところに、よく注意して、これを記憶せねばならぬ。

りも力が強くて、元氣がよかつたから、一とびに、とびあがつて、溪を越えて、この熊をよけた。然るに甲は、とびあがることが出來ないで、乙にむかつて助を求めた。けれども乙は、其れを世話してくれず、木の上に奔りのぼつて下向きにそれを見おろして居る。そこで甲はどうともすることが出來ないで、恐ろしさの餘り、息をころして、あを向きにねて、死んだ者のやうに見せかけて居ると、熊は幾たびも繰りかへして、其の頭から顏のあたりを嗅ぐことが、よほど久しくして、つひに去つてしまつた。それから乙は樹のもとから出でて、もとの所に立ちもどつて來て、甲にたはむれ、「熊が君の耳に口をよせて、ささやくことが隨分久しい間であつたが、おほかたこれは君と何か內密のはなしでもしたのであらう」というた。すると甲は之に答へて「まことに君のいふ通である。あの熊が我に告げていふには『交る友を擇ぶにはよく〳〵念を入れた方がよいから、かならず氣をつくるやうにせよ。安樂なる時には親みあうて、くるしい時には棄てゝしまふやうな者とは、ともに交るな』とのことであつた」というた。

格言

○與善人居。如入芝蘭之室。久而不聞其香。即與之化矣。與不善人居。如入鮑魚之肆。久而不聞其臭。亦與之化矣。（孔子家語）

○善人と居るは、芝蘭の室に入るが如し。久しうして其の香を聞かず。即ち之と化す。不善人と居るは、鮑魚の肆に入るが如し。久しうして其の臭を聞

かす。亦之と化す。

〔摘解〕芝蘭＝かをりよき草。○聞＝は「キク」とよむけれども、ひとり音聲ヲキクといふ意味ばかりでなく、心ニ知ルとか、鼻デ嗅グとかいふ意味ともなる。こゝでは嗅グといふ意味に用ゐたのだ。故に不レ聞ニ其香一といへば、其ノヨキカヲリヲ鼻ニ感ゼヌといふことである。○鮑魚＝の鮑は腐といふ意味で、鮑魚とは、「腐レテ甚シク臭イ鹽漬ノ魚」のことである。○肆＝は列といふ意味で、賣物を列ねて置くところ、即ち店である。○臭＝くさし。

〔通釋〕善い人と共に居ることは、丁度かをりぐさの芳しき香を放つて居る室に入るやうなものである。かをりぐさのよい香を放つてをる室に入れば、初は其の香を感ずるけれども、次第に時のたつにつれて、いつとはなしに、

其の香を感ぜないやうになるが、それと同じやうに、善い人と共に居れば、初はその善いところが目についてゐて、心に清く感ずるけれども、久しくなるに從つて、いつとはなしに、其の人の善いところも目につかないやうになるものである。これはつまり、我が身も知らず識らずの間に、その人の感化を受けて、其の人と同じやうなる者となつてしまつたからのことである。わるい人と共に居ることは、丁度臭いしほづけ魚のある店に入るやうなものである　腐れて臭い魚の列べてある店に入れば、初のほどは其の臭さを感ずるけれども、久しきを經るまゝに、つひには其の臭さを感じないやうになるが、それと同樣に、わるい人と共に居れば、初のほどは其のわるい所に目がついて、心にわるいと感ずるけれども、久しくなれば、つひには其の不善を感ぜ

ぬやうになるものである。これはつまり、其の不善人から悪い影響を受けてゐる友の如何により、其の居る處の周圍の狀態の如何により、自然に其の影響を受けて、善人とも惡人ともなるものであるから、それによく注意せねばならないといふことである。

○晏平仲善與レ人交。久而敬レ之。（論語）

○晏平仲善く人と交る。久しうしても而も之を敬す。

〔通釋〕孔子が晏嬰といふ人について、次のやうにいはれた。晏平仲は人と交際することが誠に上手だ。なぜ彼のやうに上手に人と交際することが出來るかといふに、それは決してほかではない。ただ、人と交際することが久しくなつて、次第に親みが加はつて來ても、それでもやはり初のやうに、其の人に對して敬を缺かず、互に親密に交る中にも、常に深く心に愼みを加へて行くからである。

晏平仲は名は嬰といふ人で、晏嬰といへば、昔の齊といふ國の大夫として、名の高かつた人である。齊は今の山東省にあつた。○敬は「ツヽシム」とよむ字で、謹愼して輕卒にならぬことをいふ、○これは孔子のいはれたことである。

白石篤朋

○新井白石少入二木下順菴門一。學成不レ得レ志。順菴欲レ薦二諸加賀一。岡島仲通加賀産。亦順菴門人也。聞レ之戚然語二白石一曰。予負レ笈遠遊若レ干年于茲。比得二家書一老母日逼二衰頽一。倚レ閭待レ予歸一。每二一念至一。百感攢レ心。如幸賴二吾先生先容一。得レ釋二褐于本藩一。則願足矣。白石即告二順菴一。順菴以二此言一曰。予求レ仕何國之擇。請舍レ予薦レ彼。順菴歎曰。世衰道微。日入二偸薄一。如レ子絕無而僅有者。乃推二岡島于加賀一。後二年。擧二白石于甲斐府一。時年三十七。

○新井白石、少くして木下順菴の門に入り、學成りて志を得ず。順菴之を加賀に薦めんと欲す。岡島仲通は加賀の産にして、亦順菴の門人なり。之を

人と交際をするに、最初は敬を失せないやうに氣をつけてゆくけれども、交際することが久しくなると、互に其の心にゆるみを生じて、自然其の人に不快を感ぜしむるやうのことが、言語の上にも擧動の上にもあらはれ易い者であるから、親密マス〳〵の益加はると共に、ます〳〵敬を

聞きて、戚然として白石に語げて曰く、「予、笈を負ひて遠遊すること茲に若干年なり。比、家書を得しに、老母日々に衰頽に逼り、閭に倚りて予の歸るを待つといふ。一念至る毎に、百感心に攢る。如し吾が先生の先容に賴りて、褐を本藩に釋くことを得ば、願足る」と。白石卽ち順菴に告ぐるに此の言を以てして曰く、「予が仕を求むるは、何の國をか之れ擇ばん。請ふ、予を舍きて彼を薦められよ」と。順菴、歎じて曰く、「世衰へ道微にして、日に偸薄に入る。子が如きは、絕えて無くして僅に有る者なり」と。乃ち岡島を加賀に推せり、後二年にして、白石を甲斐府に擧げたり。時に年三十七。

〔摘解〕新井白石＝名は君美といふ人で、白石はその號である。此の人は明暦の大火。卽ち振袖火事のあつた年に生れて、享保十年に死なれた。○木下

シツ失せぬやうに心がくべきことである。

＝諸の字の音は「ショ」であるから、この字を「之於」の二字のかはりに用ゐることがある。こゝは卽ちそれである。故に「薦二諸加賀一」は「薦二之於加賀」と書いたのと同じことである。又は「之乎」の二

順菴＝名は貞幹といふ人で、順菴はその號である。○薦＝は「ス、ム」とよむ。神の前に物を獻ずることをいふのであるが、それから轉じて、人に物を進上することにも用ゐ、更に轉じて、人を推擧することにも用ゐる。○戚然＝ウレヘタルアリサマ。戚は「ウレフ」とよむ。○笈＝は「オヒ」とよむ。背に負ふ書籍箱のことで、昔はこれを用ゐたのである。○遠遊＝遠方にタビをすること。○家書＝家庭からの書面。○衰頽＝オドロヘクヅルコトであるから、こゝでは、物の衰へ頽るゝ如く、元氣の衰へはつることをいふのである。○倚閭の＝閭は里閭のことである。倚閭とは、久しく歸らないのが待ちどほくて、里の門のところまで出ていつて、歸るのを待つことである。○攢＝の字は、音は「サン」で、聚と同じ意味であるから、「アツマル」とよむ。

字のかはりとすることもある。

若干。年于。並＝の于。と于。とは、能く似よつた字であるけれども、于は

○先容＝用ゐられようとする人のために、まづ申しこみをすること。即ち、その人のために、まづ其の人が用ゐるに足るぞけの人物であることをいうて、推薦（すゐせん）すること。○釋ㇾ褐＝釋は「トク」又は「スッ」などとよむから、こゝでは脫ギスツルコトである。褐は「毛織の衣」又は「アラヌノ」ともいふ字で、賤しき者の著（き）る衣服のことである。故に釋ㇾ褐とは、「ソマッナル」衣服を脫ギステ、立派ナル衣服を著くることであるから、初メテ仕官する意味となるのだ。○偸薄＝人情のうすいこと。

〔釋通〕新井白石は、わかい時に木下順菴といふ人の門に入つて勉學して、學問に上達してから、出でて仕ふるところもなくて、思ふとほりのことが出來なくて居た。然るに或時、順菴は白石を加賀の藩主に推薦しようとせられたが、加賀のウマレで之も亦白石と同じく順菴の門人たる岡島仲通といふ人が、この事を聞いて、いかにも心配なやうすをして、白石につげて、「ワタクシは、本箱（ほんばこ）を背に負うて、遠い他鄕に遊學して居ることが、こゝにはや幾年といふほどの年數になりました。この頃、ワタクシの家から手紙を受取りましたところが、其の手紙の中には、家に在る老母が、日ごとに衰へはつるやうになつてまゐりまして、ワタクシの歸るのを待ちどほくおもひ、里の門まで立ち出でて待つて居るやうに書いてあります。ワタクシは、この事にかんがへが及ぶごとに、いろいろと限（かぎり）なきほどの物おもひが心に聚（あつま）つてまゐります

「カン」といふ音であり「于」は「ウ」といふ音であつて、意味も全くちがつてをり、別の字であるから、其の區別をおぼえて居なくてはならぬ。

る。かやうな次第でありますからして、若しも幸に吾が先生の御世話によつて、故郷たる加賀の藩主に聘（へい）せられ、粗末なる書生服を加賀の藩に脫ぎ棄て

て、こゝに俸祿を受くる身となることが出來ませうならば、それでワタクシの本望は足ることであります」と話をした。すると、白石は早速この話を順菴に告げて、「ワタクシが仕を求めまするのは、何れの國に仕へたいなどといふやうに、別段その仕ふべき國を擇ぶことはありませぬ。それで、どうぞ此のたびはワタクシの方を御すておき下されて、仲通をお薦め下さい」と申しました。順菴はこれをきいて大に感心せられ、「今日は世が衰へ、人の踐むべき道も明かならずして、日に々々人情は薄らいでしまふのに、ソナタはまことに義理に厚い人である。ソナタのやうな人は、世が衰へてからこのかたは、たえてなかつたので、今ヤットノコトで出來たのである」といはれた。そこで順菴は、白石の申しいでのとほり、岡島を加賀侯に推薦せられた。其の後二年ほど經てから、白石を甲斐府に推擧せられたが、此の時に白石は三十七歳であつた。

謙信義勇

○武田氏國不レ濱レ海。仰ニ鹽於東海一。今川氏眞與ニ北條氏康一謀。陰閉ニ其鹽一。甲斐大困。上杉謙信聞レ之。寄ニ書信玄一曰。聞氏康氏眞困レ君以レ鹽。不勇不義。我與レ公爭。所レ爭在ニ弓箭一。不レ在レ米鹽一。請自レ今以往。取ニ鹽於我國一。多寡唯命。乃命ニ賈人一。平レ價給レ之。

○武田氏の國は海に濱せず。鹽を東海に仰げり。今川氏眞、北條氏康と謀り、陰に其の鹽を閉ぢ、甲斐大に困めり。上杉謙信之を聞きて、書を信玄に寄せ

て曰く、「聞く、氏康・氏眞、君を困むるに鹽を以てすと。不勇不義なり。我は公と爭へども、爭ふ所は弓箭に在りて、米鹽に在らず。請ふ、今より以往、鹽を我が國に取れ、多寡は唯命のまゝなり」と。乃ち賈人に命じ價を平にして之を給せしめき。

〔摘解〕濱＝水ノホトリ。「濱す」といへば、水ニ接スルことである。○仰ニ鹽於東海ニ＝仰は「首ヲ擧ゲテ待チ望ム」といふ意味。鹽を東海の國々から買ひとることである。○以往＝ノチ。○賈＝アキウド。諸方をあるきまはつて商ふを商といひ、家に居てあきなふを賈といふ。○給＝アテガフ。

〔通釋〕武田氏の國は海に濱して居ないから、鹽を東海の國々から買ひ入れて用ゐて居た。然るに信玄の敵たる今川氏眞と北條氏康とが相談して、內々に其の領分內から信玄の領國たる甲斐に輸出する鹽をとゞめて、出させないやうにしてしまつた。すると是れも當時信玄の敵たる上杉謙信は、この事を耳にして、書面を信玄に寄せて、「承る所によれば、氏康と氏眞との兩人は、君をこまらするに鹽を以てするさうであるが、これは實に勇氣もなく義理をわきまへぬしかたである。我はアナタと爭うて居るけども、其の爭ふ所は弓箭即ち武器を執つて相戰ふことにあつて、米や鹽にあるのではない。故にどうぞ今より以後は、鹽を我が國から取られよ。其の額の多いと寡いとは、唯、仰せのまゝに從つて、何程でも差上げませう」と云つて、そこでアキウドにいひつけて、過分の利を貪らないやうに、チダンをあたりまへにして鹽を甲斐の人々にあてがはしめた。

輝虎賦詩

○上杉輝虎勇略絶レ人。善用レ兵。毎レ臨二行陣一。馳二行軍中一數次。隊伍乃定。雅好二藝文一。其征二能州一。適ク値二九月十三夜一。會二諸將一讌飲。賦レ詩曰。

霜滿二軍營一秋氣淸。
越山幷得能州景。
數行過雁月三更。
遮莫家鄉憶二遠征一。
其風流如レ此

○上杉輝虎は、勇略人に絶し、善く兵を用ゐ、行陣を臨む毎に、軍中を馳行すること數次にして隊伍乃ち定まりき。雅より藝文を好み、其の能州を征するとき、適〻、九月十三夜に値ひ、諸將を會して讌飲し、詩を賦して曰く、「霜

は軍營に滿ちて秋氣淸し。數行の過雁月三更。越山幷せ得たり能州の景。遮莫家鄉の遠征を憶ふは」と。其の風流此の如くなりき。

〔摘解〕勇略＝勇氣と謀略と。○行陣＝行も陣もツラナルコトをいふ。列の意味である。故に行陣とは「軍陣」とか「隊列」とかいふやうな意味で、「軍隊」といふのと同じことである。○馳行＝馬に騎つて馳せ行くこと。○數次＝次は普通回といふ。數次とは數回又は數度といふと同じことである。○雅＝ツチニとかモトヨリとかよむ字で、こゝでは素と同じくモトヨリといふ意味に用ゐたのである。○藝文＝藝術文章。○能州＝能登國。○適＝マサニとかタマ〳〵とかよむ。チャウドといふ意味。○値＝アフとかアタルとかよむ。このときの音はチである。○九月十三夜＝こゝでは勿論陰曆九月十三夜のこ

とであつて、此の夜には、昔から月をめでたのである。○讌＝人々相會して談話することにもいふが、こゝではサカモリといふ意味である。醼又は燕と同じく、或は宴の字を書くこともあるか、字音はいづれもエンである。○賦レ詩＝詩を作ルこと。○軍營＝營は兵士の守つて居るところをいふ。軍營とは「陣屋（ぢんや）」のこと。○數行過雁＝行は列といふことであるから、數行過雁とは、「數列となつて過ぎゆく雁」といふこと。○月三更＝月をみれば方に十二時頃の空となつてをるといふこと。○越山幷得能州景＝越後越中の山々の面白き景色を得たる上に、今又併せて能登國の景色をも得た。謙信が武威の三州に及べる、其の得意また知るべしである。○遮莫（さもあらばあれ）＝「然（さ）モ有（あ）ラバアレ」といふ意味である。「マヽヨ」といふと同じことだ。「ソンナ事ハ、シカタガナイカラ、

三更を夜の十二時のことだといつたが、それは舊（モト）一晝夜を十二時に割り、又その十二時を十二支に配當して「子の刻」、「丑の刻」等といひ、「子の刻」を夜の十二時とし「午の刻」を晝の十二時とし、又、夜

ソレニ任（ヨカ）セヨウ」とか、「ソンナコトハ、少シモカマハヌ。ドウデモヨイ」とかいふ意味である。○憶＝は念といふ意味で、キヅカフことである。

〔通釋〕上杉輝虎は、勇氣がありて、謀略（はかりごと）をめぐらすことが、人よりも絶（すぐ）れて居て、戰爭の上手な人で、軍隊に臨んで指揮するたびに、馬に騎つて、軍勢の中を數回馳せとほつたばかりで、よく隊のクミグミが整頓した。この人は、かねて藝術文章が好（す）きであつて、その能登國を征伐するとき、チヤウド

間を五更にわけて、「戌の刻」を初更としてあるから、「子の刻」を甲夜とし、「亥の刻」を乙夜とするのである。故に「乙夜の覽」といへば、夜の十時にもなつて、ヒマに御なりなされた時に御覽になることである。

右の詩は、七言づゝ四句あるが、このやうな詩を「七言絶句」といふ。而して其の第一句たる霜滿云々を起句といひ、第二句たる數行云々を承句といひ、第三句を轉句といひ、第四句を結句といひ、

陰暦九月十三夜に遇つたからして、部下の諸將をあつめて、觀月の酒宴を催し、詩を作つたが、其の詩は、「霜は陣屋におき滿ちて、秋の氣色は清く澄みわたつて居る。此の清夜に、鳴きわたる雁の聲を聞いて大空を仰ぎ見れば、雁は數列となつて高く飛び行き、冴えたる月も中天にのぼりて、夜も方に十二時ごろとなつた。遠近を見渡せば、越後越中の山々から、能登國にかけたる好き景色を一ながめの中に入れてしまふことが出來る。我が家族や其の他鄕里の人々は、我等將士の遠征を思ひ出して、心配して居るかも知れぬが、そんな事はどうでも？よい。此の好き風景を我が物にして居る以上は、之を見すてゝ歸ることは出來ぬ。」といふのであつた。謙信の心のミヤビたることは、こんなものであつた。

九日後朝同賦二秋思一應レ制

丞相廢年幾樂思　今宵觸レ物自然悲
聲寒絡緯風吹處　葉落梧桐雨打時
君富二春秋一臣漸老　恩無レ涯岸一報猶遲
不レ知此意何安慰　飮レ酒聽レ琴又詠レ詩

○丞相廢年幾樂思。今宵觸れて自然に悲む。聲は寒し絡緯風の吹く處。葉は落つ梧桐雨の打つ時。君は春秋に富み臣は漸く老いたり。恩は涯岸無くして報ずること猶遲し。知らず此の意何の安慰することかを。酒を飮み琴を聽き又詩を詠ず。

句といふ。この起句と承句とは、同韻の字を用ゐるが普通のきまりであつて、右の詩では、清と更と征とが同じく八庚の韻である。ついでに言うておくが、右の如く韻をふむのは、那流の詩ばかりではない。西洋の詩歌にも亦皆韻がふんである。左の童謡を見てもわかろう。

一、Work while you work,（ハタラク時ニハヨクハタラキ）
　　ワーク　ホアイル　ユー　ワーク
二、Play while you play;（アソブ時ニアソブ）
　　プレー　ホアイル　ユー　プレイ

〔摘解〕九日後朝＝十日の朝をいふ。後朝とは、翌日の朝のこと。○應レ制＝ミコトノリニ、コタヘマツル。○丞相＝は支那の官名であつて、これが我が國の左右大臣に當るのであるが、菅公は此の時に右大臣であつたから、自身のことを丞相といはれたのである。尙ついでに言うてみると、我が太政大臣を相國又は大相國といふのも、支那の官名にあてたのであつて、中納言を黄門侍郎といふ官に當るからである。參議を宰相といふのも亦これ唐の官名によつたのである。大納言は「丞相に亞いで公事を行ふ」といふ意味からして、これを亞相といひ又に亞槐ともいうてある。○廢年＝年老いて元氣の衰ふること。○觸レ物＝物事に觸れて感慨を催すこと。次なる第三句の絡緯の寒聲、第四句の梧桐の落葉、などを指していふのである。○絡緯＝は蟋蟀で、今いふコホロギのことである。○富二春秋一＝春秋を多く有して居ることである。春秋とは、春夏秋冬のことである。○詠＝ウタフ。

〔通釋〕丞相道眞は、年老いて氣力も衰へましたからして、これから後に、幾ばくの樂み思ふことが有りませうか。餘す所のたのしみは、はや幾ばくもなくなりました。あはれがちなる秋のけはひでありまするのに、今宵は殊に心が色々なる物事に觸れて感慨を催し、自然とかなしみを覺えまする。肌寒き風の吹く處に、聲も寒げに絡緯の鳴きまするのも、いと哀にきゝなされまするし、庭前なる梧桐の枯葉を、雨が降り來て打ちまする音も、一しほ秋の

寂しさを添ふることでございます。辱くも陛下には、御齢わかくおはしまし、臣道眞は、次第に老衰してまゐるやうになりました。[6]聖恩を蒙ることは至大でございまして、その涯岸はございませぬものを、之を報い奉ることは出來ませずに、猶いつまでもおくれてまゐりまする。[7]至大の天恩を蒙りながら、いさゝかも報い奉ることのかなひませぬうちに、漸く老廢に至りまする臣が身は、いかなる事をして胸中の心配を安んじ慰むることが出來ませうか。[8]胸中の心配を安んじ慰むべきみちのなきまゝに、酒を飲み琴を聽き又は詩をうたひなど致しまして、せめて少しなりとも、不安の思をそれにまぎらさうと致すことでございます。

（コレハ幸福ニシテ且怡樂ナルベキ方法ナリ）

（ハヨク遊ベ）

三 This is the way（ズイス イズ ズア エー）

四、To be happy and gay.（ゲー ビー ハッピー エンド ゲー）

右の二、三、四は何れもayの韻である。我が國の歌には、韻をふめるものが殆どなくて、僅に左の如き

伊勢は津でもつ。津はいせでもつ。尾張なごやは。しろでもつ。

俗謠に稀にあるばかりである。

菅公忠愛

○菅原道眞。歷事五朝。尤爲宇多帝所親任。帝嘗好遊獵。道眞諫止之。隨事獻替。多所匡救。及被配。閉門不出。託文墨自遣。雖謫居無聊。未嘗忘忠愛之意。一日遇重陽。賦詩曰。

去年今夜侍清涼。　秋思詩篇獨斷腸。
恩賜御衣今在此。　捧持毎日拜餘香。

聞者莫不感歎。

○菅原道眞は、五朝に歷事し、尤も宇多帝に親任せられたり。帝嘗て遊獵を好みたまひ、道眞諫めて之を止めまつりぬ。事に隨ひて獻替し、匡救したて

菅公が此の詩を作られたのは、醍醐天皇の昌泰三年九月十日であつた。と見えて居る。◎思と悲と時◎と遅と詩◎とは、同じく四支の韻である。この詩の體は「七言律」というて、第一句を起句といひ、第二句を承句といふことは、七言

まつる所多かりき。配せらるゝに及びて、門を閉ぢて出でず、文墨に託して自ら遣り、謫居無聊と雖、未だ嘗て忠愛の意を忘れざりき。一日、重陽に遇ひ、詩を賦して曰く、「去年の今夜、清涼に侍しぬ。秋思の詩篇、獨腸を斷つ。恩賜の御衣、今此に在り。捧持して毎日餘香を拜す。」と。聞くもの感歎せざるは莫かりき。

〔摘解〕五朝＝清和・陽成・光孝・宇多・醍醐の五帝の御代をいふ。○遊獵＝ナグサミの爲に催さるゝカリ。○獻替＝可をすゝめ否をやむること。「替」は「廢ッ」又は「止ム」といふ意味。○匡救＝ワルイ所ヲ正シ止ムルコト。○配＝遠地に流さるゝこと。○自遣＝心の憂をはらすこと。○謫居＝咎をうけて遠地に流されて居ること。○無聊＝たよる所なきこと。心の安んぜざること。「聊」は「賴」といふ意味。○重陽＝「重九」ともいふ。九月九日のこと。「九月九日」のことを何故に「重陽」といふかといへば、易において、「九」を陽ノ數とし「六」を陰ノ數としてあるから、「九」を「陽」といひ、而して「九月九日」といへば、「九」が二つ重るからである。○清涼＝清涼殿のことをいうたのである。清涼殿とは、天子樣の常においでになる御殿の名である。○秋思詩篇＝これは前に掲げておいた七言律の詩一篇を指したのである。○腸＝腸もちぎらるゝばかりに心の憂の甚しきをいふ。○餘香＝アトニ殘リタルカヲリ。○感歎＝感心して稱むること。

〔通釋〕菅原道眞公は、五代の天皇に代々事へまつられて、其のうちでも、宇多天皇に尤も御したしみを蒙つて、事に用ゐられた。この宇多天皇が、

「無涯岸」といふやうにするのである。

「爲宇多帝所親任」を「宇多帝の親任したまふ所と爲りき」とよむは、まちがひである。「爲」の字は、平聲の時には「なる」といふ意味にもよむが、こゝでは去聲の場合であるから「らる」といふウケミの助動詞として用ゐられて居るのである。「所」もまた「爲」と同じく「らる」とよむので、この「爲」と「所」との二字が、他の語を其の間にはさんで、「…に…らる」とよむやうに用ゐられて居るのである。又「爲ニ所ヲ虜ニ」といふやうに、「爲所」をつゞけて用ゐることも全く無い

へかた御なぐさみに獵をなさることを好ませたまうたが、其れを道眞公が御いさめ申上げて、止め奉られたことがあつた。そのほか色々の事につけつゝ、善いことは御勸め申上げ、惡いことは止め奉り、御あやまちのあらせられぬやうに、輔佐したてまつらるゝことが多かつた。遠地に流されらるゝやうになつてからは、ひたすらに謹愼して、門を閉ぢて出でず、詩歌文章など作つて樂む方のなぐさみにかこつけて、みづから其の心の憂を晴らされ、御とがめの身となられ、遠き處に流されて居られて、たよらるゝ所とてもなけれど、さればとて未だ嘗てマゴコロを盡して君をいつくしみ奉る心を忘れられたことはなかつた。たま〳〵九月九日の節句にあはれたので、一首の詩を作られたが、[1]其の詩は[1]去年の今夜は此の身も帝都に在つて、清涼殿の御宴に侍したことであつた。[2]そのとき賦して御覽に供へ奉つた彼の秋思の詩篇のことを、今此の遠隔のかたほとりに在つて心に思ひ浮べては腸を斷ち切るばかりのおもひして、たゞひとり憂ひかなしむことである。[3]さて彼の時に御褒美として賜はつた御衣は、今にやはり身にそへて此に在れば、[4]親しく天顏を拜し奉ることは叶はねども、此の御衣を捧持して、毎日のこりの御かをりを拜したてまつり、せめてもの心やりにいたしてゐる。といふのであつた。此の如く、貶謫に遇うた後でも、朝夕に君を慕ひ奉られて、いさゝかも君を怨みたてまつらるゝやうの事はなかつたから、之を聞くもので、誰れも感心してほめないものはなかつた。

荒木又右衛門

○荒木又右衛門。幼時與二同年友一。獵二于鳥籠山一。山中日暮。友曰。來路遠。不レ如レ取二乎捷徑一。又右衛門曰。有レ盜。不レ可レ往。友曰。怯哉。遂先行。過二巖上一。有二壯夫一眠二其下一。鼻息如レ雷。友曰。是也。竄伏而過。渠必追矣。示レ勇可也。俱溺二其面一。壯夫駭覺曰。童子膽氣可レ愛。護送數里。其友行歌二山姥謠一。發聲高朗。既而戰慄。不レ能レ揚。壯夫笑曰。此兒客氣耳。顧二又右衛門一曰。子沈勇也。吾送至レ此。有レ所レ試也。壯夫。後與二由井正雪一爲二刎頸交一者。柴田三郎兵衞也。

○荒木又右衛門、幼時同年の友と、鳥籠山に獵し、山中にて日暮れぬ。友曰く、「來路は遠し。捷徑を取るに如かず」と。又右衛門曰く、「盜あり。往く可からず」と。友曰く、「怯なるかな」と。遂に先だちて行く。巖上を過ぐると、壯夫ありて其の下に眠る。鼻息雷の如し。友曰く、「是なり。竄伏して過ぎば、渠必ず追はん。勇を示すこと可なり」と。俱に其の面に溺す。壯夫駭き覺めて曰く、「童子の膽氣愛すべし」と。護送すること數里なり。其の友行くゆく山姥謠を歌ひ、發聲高朗なり。既にして戰慄し、揚ぐること能はず。壯夫笑ひて曰く、「此の兒は客氣のみ」と。又右衛門を顧みて曰く、「子は沈勇なり、吾が送りて此に至りしは、試むる所ありたるなり」と。壯夫は後に由井正雪と刎頸の交を爲しゝもの柴田三郎兵衞なりき。

〔摘解〕捷徑＝ハヤミチ。○盜＝ヌスビト。又は「殘賊」といふ意味ともなではないが、其は極めてすくない。或は「爲二賊傷一」としたり、「賊所レ傷」としたりするやうに、「爲」と「所」とを一字づゝで「らる」と用ゐることもある。が、最も普通の用ゐかたは「爲……所……」である。「及レ被レ配」もまた「被らる」といふ受身の助動詞である。この「被」は、もと夜具や蒲團などを「被る」といふ意味の字であつて、それが又「他よりはたらきをかうむる」といふ意味ともなるから、更に「他よりはたらきを被る」といふ意味ともなるのである。前に擧げた「爲」も「所」も皆こシムケラル」といふ意味ともなる。

る字。○往＝ユクとよむ。「行」の字もまたユクとよむけれども、「往」と「行」とは意味がちがふ。「往」は「或一定の場所を目ざしてユク」といふ意味となり、又は「ある場所に到着す」といふ意味となる字で、「還」の反對である。「行」は「通行すると」であつて、「止」の反對である。○怯＝敵に對しておそれちゞむこと。臆病。○壯夫＝氣性の壯なる男。屈竟なるをとこ。又は「壯年のをとこ」といふ意味に用ゐることもある。○眠ニ其下ニ＝ここの「下」といふ字は、「其のアタリ」とか「其のツバ」とかいふほどの意味に用ゐたのである。○竄伏＝ニゲカクル。「竄」は「匿る、こと」又は「逃ぐること」である。○渠＝カレとよむ。音は「キョ」である。此の字は「儂」の反對で、俗語である。又「渠儂」と書くときは、二字で「カレ」といふ意味になる。○溺＝

の「破」と同様に受身の助動詞として用ゐらるゝのである。

「賜の」字は、貝と易とをあはせて作つてあるので勞の方は易ではない。故に賜と書くのは誤字である。○この詩は、即ち七言絶句で、涼と腸と香とが、同じく七陽の韻である。

荒木又右衞門は、もと伊賀國荒木村の農家に

この字は、「水におぼる」といふ意味のときは、音は「デキ」であるが、小便（ユバリ、又はイバリ）といふ意味のときは、音は「デウ、又はネウ」である。而して「デウ」は漢音であつて、「ネウ」は呉音である。○膽氣＝きもだまの太いこと。勇氣あること。○護送＝附き添ひて、送りとゞくること。○戰慄＝をのゝく。恐れふるふ。「慄」は「懼」といふ意味。○客氣＝本心から出づるのでない所の、一時のつくり勇氣のこと。○沈勇＝おちついて居て、勇氣のあること。○刎頸交＝生死を齊しうして、頸を刎ねらるゝやうのことがあつても悔いぬ、といふほどの、極めて親厚なる交をいふ。

〔通釋〕荒木又右衞門といふ人が、こどもの時分に、同じ年輩の友人と共に、鳥籠山といふ山に獵をして、山の中で日が暮れてしまつた。又右衞門の友人

生れたが、うまれつき力が強くて、撃劍が好きで、柳生但馬守宮本武藏などの名高い人に就いて、劍法をならひ、其の奥儀をきはめた人である。

が曰ふには、「もと來た路を歸ると、遠いからして、別に捷徑を取る方がマシである」とのことであつた。さうすると又右衞門は、「チカミチの方には盜賊が居る。それゆゑに其の方へ向つてゆいてはいけない」といつた。すると其の友人は、「どうも君は臆病な男であるてあるいた。ところが或巖の上を過ぎとほるときに、屈竟なる一人の男が、其のとほりみちのソバに眠つて居るの。その男の鼾の聲は、雷の如く高くひゞいて居る。そこで友人は「さあ、これが其の盜賊である。われらが若も逃げ匿るゝやうにして過ぎとほるならば、彼奴は屹度われらを追ひかくるに相違あるまい。これは逃げかくるゝやうなことをせずに、此方から勇氣を見せてやるがよい」というて、兩人で以て其の壯夫の面に溺をしかけた。壯夫はビックリして、目を覺まして、「こどもたちのキモダマが大きくて勇氣のあるは愛らしいことだ」といつた。而して又右衞門等兩人に附き添うて送つて來ることが四、五里であつた。ときに又右衞門の友人は、路をあゆみながら、山姥謠を歌うて、其の歌ふ聲が高くて朗であつた。ところが間もなく恐れ震ひ出して、聲を揚ぐることが出來なくなつた。このとき、壯夫は笑つて、「この兒は强いやうに見ゆるけれども、其は本心から出る所の勇氣ではなくて、一時のつくり勇氣に過ぎない」といつた。それから又右衞門を顧みて、「そなたは沈著にして勇氣のある人である。自分が御兩人を送つて、こゝまで來たのは、ほかではなくて御兩人がどのくらゐの人たちであるかを試してみる所があつたからである」といつた。この壯夫は、後に至つて、由井正雪と生死を

共にするほどの極めて厚い交を結んだものであつて、柴田三郎兵衞といふ人であつた。

伊賀復讎（一）

○寛永十一年十一月。因幡渡邊數馬。殺二河合又五郎於伊賀上野城之下一。以報二父仇一。初數馬父曰二靱負一。與二又五郎一同仕二備前國主池田忠雄一。又五郎殺二靱負一。亡來二江戸一。投二麾下士荒井四郎一。請二借レ室自盡一。時天野十郎左衞門・池田勘兵衞・近藤騰之助。會二四郎家一飲レ酒。皆任俠少年。四郎謂二又五郎一曰。近日天下無二快事一。此足二以少吐一レ氣。子須二自愛一。吾儕保レ無レ他。乃移レ書以招レ友。應者六十九人。忠雄聞レ之怒。乃囚二又五郎母一。使二使四郎一請二又五郎一。四郎不レ與。馬。忠雄益怒。欲レ殺二其母一。四郎乃遣二勘兵衞一。說二忠雄一曰。又五郎知レ罪矣。請與二其母一換馬。忠雄乃使レ與二送其母一。四郎奪二其母一。而不レ與二又五郎一。忠雄大怒。乃與二仙臺・阿波數侯一謀。上書請下得二四郎等四人一甘心上馬。四郎亦聚レ黨自備。至二麾下士六百餘人一。

○寛永十一年十一月、因幡の渡邊數馬、河合又五郎を伊賀の上野城の下に殺して、以て父の仇を報いき。初め數馬の父を靱負といふ。又五郎と同じく備前の國守池田忠雄に仕へたり。又五郎靱負を殺し、亡げて江戸に來りて麾下の士荒井四郎に投じ、室を借りて自盡せんと請ふ。時に天野十郎左衞門・池田勘兵衞・近藤騰之助、四郎の家に會して酒を飲む。皆任俠の少年なり。四郎又五郎に謂ひて曰く、「近日天下に快事なし。此れ以て少しく氣を吐くに足れ

り。子須く自愛すべし。吾が儕他なきことを保せん」と。乃ち書を移して以て友を招く。應ずるもの六十九人あり。忠雄之を聞きて怒り、乃ち又五郎の母を囚へ、使を四郎に使して又五郎を請はしむ。四郎與へず。忠雄益怒りて其の母を殺さんと欲す。四郎乃ち勘兵衞を遣して忠雄に說かしめて曰く、「又五郎罪を知れり。請ふ其の母と換へん」と。忠雄乃ち其の母を輿送せしむ。四郎其の母を奪ひて、又五郎を與へず。忠雄大に怒りて、乃ち仙臺・阿波の數侯と謀り、上書して四郎等四人を得て甘心せんと請ふ。四郎も亦黨を聚めて自ら備ふ。麾下の士六百餘人に至れり。

〔摘解〕麾下＝ハタモト　○自盡＝自殺　○任俠＝オトコダテ　○吐レ氣＝氣息ヲツク。元氣ヲモラス。○甘心＝心モチヨクス。滿足ス。

〔通釋〕寛永十一年十一月、因幡の國の渡邊數馬が、河合又五郎を伊賀の國上野城のもとで殺して、而して父のカタキをトッタ。今この復讐の始末を敘してみると、はじめ數馬の父の靱負といふ人が、又五郎と同じく、備前の國のとのさまで池田忠雄といふ人に仕へて居た。然るに又五郎は靱負を殺し、家を逃げ出して、江戸に來つて旗本の士の荒井四郎といふ人の許にたよつて往き、室を借りて自殺したいと願つた。時に天野十郎左衞門・池田勘兵衞・近藤騰之助の三人が四郎の家に來合せて、酒を飲んで居た。此の人々は何れもヲトコダテなワカモノである。そこで四郎が又五郎に謂つていふには、「近頃は世の中に面白い事がないから外にもらすに足る事柄である。そなたは御身を大切にせられなくては

いけない。われゝゝが決してまちがひのないやうにして世話を致さうから」とのことであつた。かくいうておいて四郎は書面を移して友だちを招いた。同意して之に加擔するものが六十九人できた。備前侯忠雄は之を聞いて怒り、そこで又五郎の母を召しとらへておいて、使者を四郎に差し向けて、又五郎を引渡せと請はしめられた。四郎は又五郎を與へない。忠雄はます々々怒つて、又五郎の母を殺さうと思はれた。四郎はそこで勘兵衞を遣して忠雄に說かせて「又五郎は其の身の罪を能く承知して居る。どうか、又五郎と其の母と交換したい。」というた。忠雄は其の申込を承諾して、そこで又五郎の母を乘物に乘せて送らしめた。然るに四郎は約束をいつはり其の母を奪ひとつて、又五郎を與へない。忠雄は大に怒つて、そこで仙臺侯や阿波侯等の諸侯たちと相談して、書を將軍家に上つて、四郎・十郎左衞門等四人を申受けて、それで以て心に滿足するやうにしたいと願ひ出でた。四郎もまた味方を集めて自ら用心した。其の徒黨に加はつた旗本の士は。六百人の多きに至つた。

備前侯池田氏は、德川將軍家から〔松平〕といふ氏を賜はつたから、松平忠雄と書いたのもある。

伊賀復讎（二）

○居亡幾。忠雄病卒。子光仲嗣封。忠雄臨終。遺命必斬又五郎。以祭吾墓。雖由此喪國不顧也。既而有命。幽四郎等四人。而錮又五郎。又五郎匿于參河海濱。數馬時年十六。辭仕以報讎。光仲謂數馬曰。又五郎慓悍多黨。恐不易敵也。誰居戮力者。對曰。欲適郡山借力姉夫荒木村光。乃許去。村光稱又右衞門。舊伊賀荒木村農夫。生而勇趫。軀幹

魁梧。力兼二十夫一。學二劍於柳生宗矩一。游二四方一角レ技。無レ有二能抗者一。郡山ノ城主本多政朝聘レ之。故仕二於郡山一。及二數馬往請一。村光奮曰。子之讎乃吾之讎。請與共焉。乞二暇政朝一。政朝義而允レ之。賜レ金。不レ受。賜二佩刀一。乃受。託二拏其師一。頒二器財於弟子一。弟子北藤喜兵衞・山根武兵衞請而從焉。

○居ること幾ばくもなくして忠雄病みて卒し、子の光仲封を嗣ぐ。忠雄終に臨みて「必ず又五郎を斬りて、以て吾が墓に祭れ。此に由りて國を喪ふと雖、顧みざれ」と遺命せり。既にして命あり、四郎等四人を幽して、又五郎を錮す。又五郎、參河の海濱に匿る。數馬時に年十六。仕を辭して以て讎を報いんとす。光仲、數馬に謂ひて曰く、「又五郎は慓悍にして黨多し。恐らくは敵し易からざらん。誰か力を戮せん者ぞ」と。對へて曰く、「郡山に適きて力を

誰◎居◎戮◎力◎者の居は、こゝでは疑◎問

姉の夫荒木村光に借らんと欲す」と。乃ち許して去らしむ。村光は又右衞門と稱す。舊伊賀の荒木村の農夫にして、生れながらにして勇趫なり。軀幹魁梧にして、力は十夫を兼ぬ。劍を柳生宗矩に學び、四方に游びて技を角ぶるに、能く抗する者あることなし。郡山の城主本多政朝之を聘す。故に郡山に仕へたり。數馬の往きて請ふに及びて、村光奮ひて曰く、「子の讎は乃ち吾の讎なり。請ふ與に共にせん」と。暇を政朝に乞ふ。政朝義として之を允し、金を賜ふ。受けず。佩刀を賜ふ、乃ち受く。拏を其の師に託し、器財を弟子に頒つ。弟子北藤喜兵衞・山根武兵衞請うて從へり。

〔摘解〕喪＝は、こゝでは喪失の喪であつて、ウシナフといふ意味。○幽＝トラフ○錮＝オシコム○慓悍＝スバヤクしてタケシ○戮＝の音はリクであつ

て、勠と同じく「アハス」といふ意味。○適＝は「ユク」とよむ字で、「オモムク」又は「指シテユク」といふ意味○勇趫＝イサマシク、タケシ。趫は健と同じ意味の字である。○魁梧＝すぐれておほきい。○游＝は遊と同字である。魚の無心にして水中におよいで居るやうに、足に任せてあそびあるく意味である。又この遊の旁の游はフキナガシといふ字で、魚が無心にして水中におよいで居るのは、旂が風のまにまに吹き流されて居るのと、其の有様が似て居るから、旂の字に水を加へて游の字を作つたのであらうと思ふ。○抗＝あたる。はりあふ。○聘＝禮を以て迎ふること。○孳＝子といふ意味ともなり、妻子といふ意味ともなる字。

〔通釋〕 それから月日のたつことが幾ばくにもならぬうちに、備前侯忠雄は病氣でなくなられて、其の子の光仲といふ人が領地をうけつがれた。忠雄は、其の卒せらるゝときに、「必ず又五郎の首を斬り、而して其の首を余が墓に手向けて祭をせよ。たとひ此の事件のために我が領土を失ふやうなことがあらうとも、其はかまふまいぞ」と遺言をせられた。それから間もなく、將軍家からの命があつて、四郎等四人をめしとりて又五郎をおし込めらるゝことになつた。すると又五郎は三河の海邊に匿れて居た。數馬は時に十六歳の少年であつたが、役目をことわつて而してかたきを討たうとして居る。光仲が數馬にいはるゝには、「又五郎はスバヤクしてタケキものであつて、其のなかまの者どもが多い。されば、おまへが又五郎に敵することは、容易であるまいと氣づかはるゝが、たれか共に力をあはせてくるゝものがあるか」とのおほ

の意味に用ゐたので、「誰居（たれか）」とよむべき所である。◎この居はまた感動の意味に用ゐることもあるが、それは「日居月諸（ひつきもろもろ）」といふやうな場合である。このとほりに、疑問或は感動に用ゐられたるときは、此の字の音はキであつてキヨではない。

卒の字は、「死ぬ」といふ意味のときには、「シユツ」といふ音である。この字は、我が邦のきまりでは、「五位以上の人の死」についてもになつて居るから、たとひ德望の高い人であらうとも、其の人にそれだけの位のない以上は、「卒す」とはいへぬ筈で

せであつた。數馬は其の御たづねに對して、「郡山に志してまゐりまして、臣が姉の夫になつてゐまする荒木村光に力を借らうと存じまする」と申上げた。そこで光仲は、數馬の願を聽屆けて去らしめられた。さて此の村光といふ人は、通稱を又右衞門というて、もとは伊賀の國の荒木村の農夫であつて、生れつき勇ましくたけき人である。其のからだは、すぐれて大きくて、力は十人まへも兼ねて居る。劍術を柳生但馬守宗矩に學び、方々をあるきまはつて、技術をくらべてみるのに、能くはりあふものはない。郡山の城主の本多政朝といふ人が、禮を以て村光を招かれた。故に村光は郡山に仕へて居た。數馬が其處にたづねてゆいて、力を借りたいといふことを願ふに及んで、村光は奮ひたつて、「おまへの讎は乃ち吾の讎である。どうぞ吾も共に連れ立ちてかたきを討ちたい」というた。それから御暇を主君政朝に乞うた。政朝は村光の願を義として之を允されて、金錢を下賜せられた。村光は受けない。其の佩用せらるゝ太刀を與へられた。村光は乃ち其を拜領した。妻子をその師にたのみおき、所有の器物財寶を弟子に分ち與へた。弟子のうちで、北藤喜兵衞と山根武兵衞との二人は、まごころを以て願ひ出でて、村光に從うた。

ある。この文中の池田忠雄は、寛永九年四月に、正四位下で死んだ人であるから「卒す」と書いてあるのは當然である。○請の字は、「この御願を許容せらるべしや」といふやうに、先方の意をうかゞひつゝ誠を以て願望する意味に用ゐ、又は「何卒」といふほどの意味にも用ゐる。乞の字は、ねがひ求むる意味である。

祭の字は、月と又と示とから綴られたのであるから、祭と書くは誤りである。○奮の字は、下の方

伊賀復讎（三）

○又五郎有伯父。曰櫻井甚右衞門。其弟曰甚佐。亦仕郡山。及聞又五郎事。皆致仕以去。將相拉以如鎭西。時四郎等既蒙赦。復黨又五郎。令劒客星合段兵衞・勘兵衞他力士十人護送。及從隷數十名。以肥後球麻僻遠。囑

は田であるから、これを奮とした奮としたりするのは誤である。

城主相良氏。以舍又五郎。相良氏許諾。發人爲導。涂由間道。數馬諜而得之。蹤及伊賀。日既晡矣。數馬謂。吾仇聞於天下。夜襲非武。且恐逋逸。不若白日相面而鬪。翌日天明。要諸上野城之下。

○又五郎に伯父あり。櫻井甚右衞門と曰ひ、其の弟を甚佐と曰ふ。亦郡山に仕へたり。又五郎の事を聞くに及びて、皆致仕して以て去り、將に相拉へて以て鎭西に如かんとす。時に四郎等既に赦を蒙り、復又五郎に黨し、劍客星合段兵衞・勘兵衞・他の力士十人をして護送せしむ。及び從隷數十名あり。肥後の球麻は僻遠なるを以て、城主相良氏に囑するに、又五郎を舍せんことを以てす。相良氏許諾し、人を發して導を爲し、涂間道よりす。數馬諜して之を得、蹤して伊賀に及べば、日既に晡なり。數馬謂へらく、「吾が仇は天下に聞えたり。夜襲ふは武に非ず。且、逋逸せんゝとを恐る。白日相面して鬪はんには若かず」と。翌日天明、これを上野城の下に要す。

〔摘解〕致仕＝官職を辭すること。役目を還すこと。「主君からあづかつて居た官職を、また主君にかへす」といふ意味。○拉＝の音は「ラフ」であつて、「ラッ」とも發音するが、これは「十」を「十」と發音するのと同樣なるわけである。拉は、人を邀へて同行すること、即ち「人を待ち受けて共に行くこと」である。○僻遠＝片田舍で、都からは遠く離れた土地。○囑＝たのむ。○許諾＝うけあふこと。承諾。○涂＝の音は「ト」である。「道路」といふこと。○閒道＝ぬけみち。○諜＝內密に敵の動靜を探ること。うかがふ。○蹤＝は跡と同じく「アト」といふ意味の字で、「蹤す」といふやうに、動詞とし

て用ゐるときは、あとづけてゆく意味となるのだ。○晡＝申の刻、即ち今の午後四時。○襲＝敵の不意を撃つこと。○逋逸＝逃げ遁る。○要＝待伏すること。

〔通釋〕又五郎に伯父（父の兄）さんがあつて、其の人を櫻井甚右衞門といひ、甚右衞門の弟を甚佐といつた。此の兄弟二人も亦荒木と同じく郡山の本多氏に仕へて居たが、又五郎の事を聞いてからは、二人ともに仕を辭して郡山を立ち去り、それからは又五郎を待ち受け、打連れて九州に如かうとして居る。時に荒井四郎など、さきに幽せられた四人は、既に赦を受けて、更にまた、又五郎にくみし、劍客の星合段兵衞や池田勘兵衞や、其のほかの力士十人をして、又五郎を其の目的地まで護送するやうにさせた。尙またシモベ

襲の音はシフである。この字を「襲敵」といふやうに用ゐるときは、「敵の不意を撃つ」といふ意味であるから「オソフ」とよむが正しいのであるが、「襲衣」とするときは、「衣をかさぬ」とよまねばならぬので、「衣をオソフ」とよんでは いけない。「襲爵」とは「爵を繼ぐ」といふことであるから、これも「爵をオソフ」とよむのは可笑しい。やはり「爵をツグ」とよむのが至當である。

四五十人もあつた。肥後の球麻は、都から遠く離れた片田舍であるからして、其處の城主たる相良氏に賴むに、又五郎をおいてもらひたいと云ふ事を以てした。相良氏はそれを承知して、人を差しむけて案内までさせてやり、其の道すぢは、ヌケミチを取ることにした。數馬は内密にやうすを探つて之を知り、其のアトをつけて、伊賀で追付いたときは、其の日も既に午後四時頃であつた。そこで數馬がおもふには、「吾が仇は廣く世の中に聞えわたつて居る。それを夜中におそひ撃つやうな事をするのは武勇でない。のみならず逃がしてしまふ心配もある。晝間に互にむかひ合うて戰ふにこすことはない」と。其の翌日の夜あけがたに、敵を上野城の下に待伏せて居る。

伊賀復讎（四）

○村光斫ニ櫻井一。數馬與ニ又五郎一合レ刃。星合等左右夾湊。以擊ニ數馬一。喜兵武兵捍禦奮鬪。村光虬髯虎視。舞ニ長刀一。縱橫豨突。所レ當應レ聲而斃。敵射レ之不レ中。再抽レ矢。卽身首旣判矣。喜兵殪ニ四人一。武兵殪ニ七人一。與ニ數馬從隷一皆死。而數馬輸贏未レ決。村光所ニ擊殺一十有七人。最後提レ刀立ニ乎數馬側一。數馬蒙ニ三創一。全身朱殷。微卻而倒。又五郎投レ槍而進。數馬跳絣ニ其左臂一。遂獲レ首。街近ニ上野城一。城主藤堂高次。使ニ公族玄蕃率ニ兵數百人一周ニ衛塗巷一。觀者如レ堵。旣勝。玄蕃進問レ故。村光爲ニ說ニ顚末一。辭氣安徐。不レ異ニ平日一。明日。高次召ニ見數馬及村光一。寵奬備至。先レ是。光仲自ニ備前一移ニ封因幡一。高次馳レ价告レ之。光仲使ニ步騎數隊一迎レ之。詣ニ伏水一。高次亦發ニ士卒一。護送二士。光仲褒ニ賞數馬及村光一。皆祿ニ三千石一。構ニ宅郭內一。深レ隍高レ垣。以居レ之。世謂ニ之伊賀復讎一。

○村光先づ櫻井を斫る。數馬は又五郎と刃を合す。星合等左右より夾湊して、以て數馬を擊たんとす。喜兵・武兵、捍禦し奮鬪す。村光虬髯虎視し、長刀を舞して縱橫に豨突す。當る所、聲に應じて斃る。敵之を射れども中らず。再び矢を抽かんとすれば、卽ち身首旣に判れたり。喜兵は四人を殪し武兵は七人を殪し、數馬の從隷と皆死す。而して數馬の輸贏未だ決せず。村光の擊殺せし所は十有七人なり。最後に刃を提げて數馬の側に立つ。數馬は三創を蒙り、全身朱殷なり。微しく卻きて倒る。又五郎、槍を投げて進む。數馬、跳

虬髯虎視は、虬の髯のやうな恐ろしい髯を生やして居て、虎の目つきのやうな怖いめつきで睨むことであるから、「虬の如き髯して虎の如く視ひ」とか、「虬髯して虎視し」とかいふやうによめば、我が國語の法則上からは極めて穩當であるが、今日普通の習慣に

りて其の左臂を縛ち、遂に首を獲たり。街は上野城に近し。城主藤堂高次、公族玄蕃をして兵數百人を率ゐて塗巷を周衛せしむ。觀る者堵の如し。既に勝てり。玄蕃進みて故を問ふ。村光爲に顛末を說く。辭氣の安徐なること平日に異ならず。明日、高次、數馬及び村光を召し見て、寵奬すること備に至れり。是より先、光仲、備前より封を因幡に移されき。高次价を馳せて之を告ぐ。光仲、步騎數隊をして之を迎へしめ、伏見に詣る。高次も亦士卒を發して、二士を護送す。光仲、數馬及び村光を褒賞して、皆三千石を祿し、宅を郭內に構へ、隍を深くし垣を高くして、以て之を居らしめき。世に之を伊賀の復讎と謂ふ。

〔摘解〕斫＝の音はシヤクで、キルとよむ。「キリ落ス」ことである。「首ヲ斫ル」とか、「木ヲ斫ル」とか、又は「斬斫」とかいふやうに用ゐる字である。○夾湊＝さしはさんで攻めつけてくること。夾は「ハサム」といふ字、湊は、「アツマル」とか、「ス、ム」とか、「オモムク」とかいふ意味の字である。○捍禦＝ふせぎまもる。捍は「扞」と同じく「フセグ」とか「マモル」とかいふ字、禦も「フセグ」といふ意味の字である。○豨突＝ゐのしゝの走るやうに突きかゝること。奮擊するありさまの激しきをいふ。○從隸＝供。隸はシモベとか、メシツカヒとかいふ字。○輸贏＝まけかち。輸はマケ、贏はカチ。○十有七人＝は十七人といふこと。有は又と同じ。○朱殷＝赤黑き色。殷は「サカンナリ」といふ意味のときには「イン」といふ音であるけれども、「アカグロ」といふ意味のときの音は「アン」である。○卻＝は却の本字。○縛＝の

よつて「虬視し」とよんでもよいと思ふ。

音は「セツ」で、絕とも書く。此の字は斷と同じく「タツ」とか「ル」とかいふ意味の字である。○塗巷＝ちまた。塗は「ミチ」といふ字、巷もまた通路のことで「ミチ」とか「ロジ」とかいふ意味の字である。○堵＝家のまはりの垣、如ㇾ堵とは、「人垣をこしらへた」ともいふほどに、人々の多く寄り集ひたるをいふ。○顚末＝始から終まで。本末といふのと同じことで、顚は本といふ意味の字である。○安徐＝おだやかなること徐は「オモムロ」とか、「シヅカ」とか「ヤスラカ」とかいうて、やはり安と同じ意味である。○寵奬＝かはゆがりほむること。寵は愛すること、奬は褒むること又はげますことである。○价＝は介と同じく、「下男」とか「ヲトコ」とかいふ意味に用ゐたのである。○隍＝の音は、クワウで、「水の無いほり」のことである「カラ

癆の音は、エイであつて、「タフス」といふ意味にも、「タフル」といふ意味にも用ゐる字である。而して「タフス」といふときには「タフシ殺ス」ことで、「タフル」といふときには「タフレ死ヌ」ことである。斃

ホリ」とよむ。

〔通釋〕村光が先づ櫻井甚右衞門を斬つておとした。數馬は又五郎と戰つて居る。星合段兵衞などは、數馬の左右から夾み擊ちに攻め寄せて來て、數馬を擊ち取らうとして居る。すると北藤喜兵衞・山根武兵衞の兩人は、ふせぎ守つて勢鋭く鬪うて居る。村光は虬の髯にも喩ふべき恐ろしき髯を生やして居て、猛虎の目つきのやうな怖い目を怒らし、長き刀を打ち振りつゝ縱橫に斬りまくり、豨の突きかくる如き勢を以て、めざましくはたらけば、其の對手とするものは、村光が勢込んで發する曳聲に從つて、斃れ死んでしまふ。劍を取つて對うては、とても村光に勝つことは出來ぬと見たる敵は、弓を以て射るけれども中らず、再び矢を抽かうとすると、直ちに首は村光にうち落

されてしまつた。喜兵衞は四人を殺し、武兵衞は七人を殺し、數馬の供に連れて居たものと、皆死んでしまつた。而して數馬と又五郎との勝負は未だわからない。村光が擊ち殺した者は十七人である。村光は最後に拔刀を提げて數馬の側に立つた。數馬は三ケ所に創を受け、全身、血に染んで朱殷になつて居る。而して少しく後へ郤いて、仰樣にたふれた。そこで又五郎は槍を投げ出し、進みよつて首を斬らうとする。數馬は飛び上りさまに又五郎の左の臂を切り落し、それからして遂に其の首をうち取つた。こゝの通路は、伊賀の國の上野城に近いところである。この城主の藤堂高次といふ人が、城主の一門の藤堂玄蕃といふ人に命じて、數百人の兵士を引きつれて、他からの邪魔がないやうに、其處の通路を周つて衞らしめられた。見物人は人垣をつ

もまた瘡と同樣の意味の字である。倒の音はタウであつて、これも「タフス」といひ、また「タフル」といふ意味に用ゐる字である。而して「タフス」といふときには「サカサマニタフス」ことで、「タフル」といふときには「仰樣ニタフル」ことである。此の字は「タフシ」たり、「タフレ」たりするまでの意味で、「コロス」とか「シヌ」とかいふほどの意味はない。

くるほど多く集つた。數馬が既に勝つてからして、玄蕃は進み寄つて復讐の次第を尋ねられた。村光は之に對へて其の一伍一什を陳べたが、其の時に村光の話しぶりの落着いておだやかなる事は、平生と異はなかつた。其の翌日に、高次は、數馬と村光とを呼び寄せて之に會はれ、此の二人を愛で褒めらるゝことは、どこまでも行きとゞいて居た。さて又この時よりも前に、數馬の主君たる池田光仲は、もとの備前の國からして、其の領地を因幡の國に移されて居られた。故に藤堂高次は使者を馳せて、復讐のことを光仲に告げられた。すると光仲は、歩兵・騎兵合せて數隊の兵士を遣して數馬と村光とを迎へしめられて、其の一行が伏見に達した。それから高次も亦士卒を遣して數馬等二人を護送せしめられた。光仲は數馬と村光とを褒めて之に賜與せら

れ、二人共に三千石の祿を給せられ、宅を城の郭の内に構へ、からほりを深くし垣を高くして、而して二士を之に居らしめられた。世に此の事を伊賀のあだうちといふ。

士規七則

○披繙冊子。嘉言如林。躍躍迫人。顧人不讀。即讀不行。苟讀而行之。則雖千萬世。不可得盡。噫復何言。雖然。有所知矣。不能不言。人之至情也。古人言諸古。今我言諸今。亦詎傷焉。作士規七則。

○冊子を披繙すれば、嘉言林の如く、躍々として人に迫る。顧ふに人讀まざるのみ。即讀むとも行はざるのみ。苟讀みて之を行はば、千萬世と雖、盡すことを得べからじ。噫、復何をか言はん。然りと雖、知る所ありて言はざること能はざるは、人の至情なり。古人は之を古に言へり。今、我は之を今に言ふとも、亦詎ぞ傷まん。士規七則を作る。

〔摘解〕披繙＝ヒラクこと。披は「ヒラク」とよむ。繙は「結ンデアル紐ヲ解ク」こと、「ヒモトク」とよむ。○冊子＝綴ヂタル本。「書物」といふこと。「サウシ」とも讀む。冊は昔の時代に「札を韋で綴ヂタ」そのかたちから出來た字である。○嘉言＝ヨイ言葉。嘉は美とか善とかいふ意味。○如林＝林に木や竹の數多く叢り立つて居るやうに、數へつくされぬほど多いこと。○躍躍＝迅きこと。兎が躍り跳ねて疾く走るやうに迅きこと。躍の音は、多

この文は、吉田松陰先生の作である。先生は長州の藩士で、その名を矩方といひ、字を義卿といひ、通稱を寅次郎といひ、松陰と號し、又二十一回猛士と

も號し、國事に奔走して投獄され、安政六年に、二十九歳にして、刑に處せられた人である。

くの場合に「ヤク」であるが、こゝでは「テキ」といふ音である。○顧＝こゝでは「オモフ」とよむ。「心ニカヘリミオモフ」ことである。○即＝は、「スナハチ」と普通よむ字であるが、こゝは「モシ」とよむべき所であつて、若と同じ意味に用ゐてあるのだ。○苟＝は、「イヤシクモ」とよむのが普通で、「マコトニ」とよむ場合もあるが、こゝでは若と同じ意味に用ゐてあるから、「モシ」とよむ方が能くわかる。「モシモ……デアリサヘスルナラバ」といふことである。○至情＝マコトノコヽロ。○諸＝は、前にも出てゐたとほり之於の二字又は之乎の二字と同じ用をなすのだ。○詎＝は「ナンゾ」といふ字で、「豈」といふ反語と同じ意味である。この字の音は「キョ」で、巨又は渠もこの字と同じく用ゐる。又寧とつゞけて「寧詎」と用ゐることもある。○士規＝士たるものゝ守るべき法則。○士は「士・太夫」など、身分に就きていふときと、「ヨイ人、すなはち君子」といふ意味のときとある。こゝの士は、現今の謂はゆる紳士と同じ意味である。

〔通釋〕書物を開いて見ると、よい言葉が數知れぬほど多くあつて、それが迅速に人の前に近づいて來る。然るに其のよい言葉が世に多く忘れられてゐるのは、予ひそかにおもふのに、世人が書物を讀まないからである。もし之を讀んでも、行はないからである。若も書物を讀んで、之を行ひさへするならば、其の嘉言は千萬年の久しい間かゝつても、行ひ盡すことの出來ないほど多くあるはずである。あゝ此のほかに又何の言ふべきことがあらうか。さりながら、たしかに知ることのある者を、それを言はずに居ることの出來な

いといふことは、是れ人々の自然の心である。古の人は、知ることあれば古において既に之を言うて居る。今われは我が知ることを今において言はうとも、何の我が心を傷ましむることがあらうか、少しも心を傷ましむることはない。故に今之を言はんが爲に、紳士たる者の守るべき規則七箇條を作つておくのである。

一、凡生爲レ人。宜シク知二人所一以異二於禽獸一。蓋人有二五倫一。而君臣父子爲二最大一。故人之所二以爲一レ人。忠孝爲レ本。

○凡そ生れて人と爲れば、宜しく人の禽獸に異なる所以を知るべし。蓋し人に五倫あり。而して君臣・父子を最も大なりとす。故に人の人たる所以は、忠孝を本とす。

〔摘解〕所以＝ワケ。理由。○五倫＝君臣・父子・夫婦・長幼・朋友をいふ。倫は「トモガラ」とよむ字で、兩者相對したるとき、其の間に生ずる道をいふ。ついでに、五常とは、仁・義・禮・智・信の五の德をいふ。

〔通釋〕凡そ此の世に人として生れたる以上は、人が禽獸と異つて居る理を知るが宜しい。おほかた、人には兩者相對して其の間に生ずる五のみちがある。而して其の五の中でも、君臣の道と父子の道との二を最も大切とする。故に人たるものが、人として特に禽獸よりも尊い理は、君に對する忠と、父に對する孝とを、能く盡すといふ點が、其の本となるのである。されば忠孝は人道の大本たることを心得ねばならぬ。

一、凡生二皇國一。宜シク知二吾所一以尊二於宇內一。蓋皇朝萬葉一統。邦國士夫。世

襲ニ祿位一。人君養レ民。以續ニ祖業一。臣民忠レ君。以繼ニ父志一。君臣一體。忠孝一致。唯吾國爲レ然。

○凡そ皇國に生れては、宜しく吾が宇内に尊き所以を知るべし。蓋し皇朝は萬葉一統にして、邦國の士夫、世々祿位を襲ぎ、人君は民を養ひて、以て祖業を續ぎたまひ、臣民は君に忠にして、以て父の志を繼ぐ。君臣一體に、忠孝一致なるは、唯吾が國をのみ然りとす。

〔摘解〕宇内＝「天が下」といふこと。宇とは天地四方をいふ。○萬葉＝萬世。葉は世と同じ。○士夫＝君に仕へて祿位を受くるもの。夫は男といふ意味。○祿位＝祿と官と。祿とは仕へて官にあるものゝ受くるすべての物をいふので、今日でいへば、俸給のこと。○祖業＝先代からの業。こゝでは「皇祖より傳へたまへる業」といふこと。萬民を愛で養ひたまふは、我が皇祖より傳へたまへるオホミワザである。○父志＝こゝでは、父祖からの志といふ意味に解するが至當である。直接には、子は父の志をつぐのであるが、父はまた其の父の志をついで來たのであるから、やはり、先祖代々の志をつぐのである。忠君は即ち我が國民たる者の志である。○一體＝ヒトツスガタ。同じありさま。「一致」といふのと同じ意味。人君は祖業をついで臣民を愛養したまひ、臣民は父志をついで忠君の誠を效す。かくて上下共に其の祖先のとほりにして之を萬代に傳ふることは、其のおもむきを全く同一である。○一致＝オモムキを一樣にすること。同一に歸著すること。君に忠なるものは親に孝なり、親に對して孝なるは君に對して忠なる

所以であるから、即ち忠と孝とは一致することになるのだ。

〔通釋〕凡そ我が皇國に生れたるものは、わが國が世界に於ける何の國よりも尊い理を知るが宜しい。おもふに我が國の朝廷は、萬世一系の帝統にて臨ませたまひ、我が國の官にある者は、世々其の俸祿と官職とを受けつぎ、天子さまは民を養うて、皇祖の業を代々に續ぎたまひ、臣民は君にマゴコロを盡して、父祖の志を後々に繼いでゆく。かくて其の祖先のとほりにして、永久にかはらざることは、君臣共に同一のすがたであり、忠と孝とは一致して、其のおもむきを異にせぬのであるが、是はひとり我が國のみが此のやうであるので、外國には決してないことである。

一、士道莫レ大ニ於義一。義因レ勇行。勇因レ義長。

○士道は、義より大なるは莫し。義は勇に因りて行はれ、勇は義に因りて長ず。

〔摘解〕義＝は宜と同じく、行爲の宜しきにかなふこと。利害の念に迷はず、志を堅くして正しき道を行ふこと。○長＝進むこと。

〔通釋〕紳士たるものゝ道としては、おのれの利害をほかにして行爲の宜しきにかなふやうにすることより大切なることはない。又、たとひ正しき道理と知つて居ても、勇氣がないときには之を行ふことが出來ぬもので、即ちこの義は勇氣に因つて行はるべきものである。なほ又、勇氣があつても、其の心が道理に暗くして義を知らぬときは、眞正の勇氣を養ふことは出來ぬもので、眞正の勇氣は義に因つて進めらるべきものである。要する

○續は斷の反對であつて、絶えまなくつゞくること、繼は「アトヲツグ」といふ意味。この二字を連れ用ゐて、繼續とすれば、やはり「つゞけてゆく」といふ意味となる。襲は「アルモノヲ受ケツグ」こと。

に、義と勇とは、互に相待つて行はれ、相待つて進めらるべきものである。

一、士行以ニ質實一不レ欺爲レ要。以ニ巧詐一文レ過爲レ恥。光明正大。皆由レ是出。

○士の行は質實にして欺かざるを以て要とし、巧詐にして過を文るを以て恥とす。光明正大は、皆是れより出づ。

〔摘解〕質實＝マコト。○もまた「マコト」ともよむ字である。○巧詐＝巧に詐ること。○巧もまた「イツハリ」ともよむ字である。○文レ過＝の文は、飾ると同じ意味の字で、「カザル」とよむ。○恥＝みづから其の心にはぢとがむること。辱もまた「おのが心にはぢとがむること」をいふ字なれど、辱の字は、「人からはぢを與へらるゝこと」にもいひ、「人にはぢを與ふること」にもいふ字である。而して「人にはぢを與ふる意味」からして、「恐多し」といふに用ひ、「辱し」とよむやうになるのだ。○光明＝あきらかなること。ひかり。○正大＝至極正しきこと。○光明正大＝あきらかにして、極めて正しきこと。「公明正大」といへば、すこしも私なく、うしろぐらき所なきこと。

〔通釋〕紳士たる者の行としては、まことにして欺かぬことを以て肝要とし、巧に詐つて過をかざるを以て恥とす。どこまでも明にして極めて正しいことは、この質實なると過を飾らざるとより出づるものである。

一、人不レ通ニ古今一。不レ師ニ聖賢一。則鄙夫耳。讀書尚友。君子之事也。

○人、古今に通せず、聖賢を師とせざれば、鄙夫たるのみ。讀書尚友は、君子の事なり。

〔摘解〕鄙夫＝心の卑しきをとこ。○尚友＝の「尚」は「上」に同じ音で、同じ意味である。「上」は「ノボル」とも「クハフ」ともよむ字である。故に尚友とは、「現在の世の善士を友とするがうへに、更に古の人までも加へて友とすること」である。○君子＝徳の高き人。

〔通釋〕人として、古今の事柄をわきまへず、聖人・賢人といはるゝ人を師とせないときは、其の人は心の卑しき劣等なる人たるに過ぎない。そこで、書を讀んで古今に通じ、ひとり現在の世の善士を友とするのみならず、更に古の人までも之を加へて友として、以て智をみがき徳をさむることは、是れ君子のする事である。

一、成レ徳達レ材。師恩友益居レ多焉。故君子愼二交遊一。

○徳を成し材を達するには、師恩・友益、多きに居る。故に君子は交遊を愼む。

〔摘解〕成レ徳＝おのれを正しい善い人物として、しあぐること。○達レ材＝才能をみがきあぐることと。○愼＝物事に深く用心して、粗略にせぬこと。「愼重」、「戒愼」など、よく念を入るゝ意味に用ゐる。

〔通釋〕立派なる人物となり、才能を十分にそなふるには、師の教を受くることゝ、善き友のたすけを得ることゝが、多きに居るものである。故に君子は、相共に交り遊ぶ人を、十分に念を入れて選擇するものである。

一、死而後已四字。言簡而義廣。堅忍果決確乎不レ可レ抜者。舎レ是無レ術也。

○「死して後に已む」の四字は、言簡にして義廣し。堅忍果決にして、確乎

として抜くべからざるもの、是を舎さて術なきなり。

〔摘解〕死而後已＝は、論語に、「士不レ可ニ以不ニ弘毅一。任重而道遠。仁以爲ニ己任一。不ニ亦重一乎。死而後已。不ニ亦遠一乎」とあるが、これから出たのである。○果決＝思ひ切つて事を定むること。決斷のよいこと。○舎レ是＝これをさしおく。舎は「ミアハセオク」といふ意味。○術＝ミチ。方法。この字は行と朮とを合せて作つてあるので、「行」の方では「ミチ」とか「方法」とかいふやうな意味を生じ、「朮」の方では音が出る字であるから、術と書かねばならぬので、術と書くのは誤である。これと同樣に、陳述の述を述と書くのも勿論あやまりであつて、述は好述などというて、別に其の字がある

〔通釋〕「死而後已」といふ四字は、言葉はやすいけれども、意味は廣い。如何なる艱難痛苦に出會うても、堅く忍びこらへ、事に當つては決斷がよく、確乎として抜くことの出來ないやうな人となるには、此の「死して後に已む」といふ覺悟をさしおいては、他に其の方法はない。

○右士規七則。約爲ニ三端一。曰。立レ志以爲ニ萬事之源一。擇レ交以輔ニ仁義之行一。讀レ書以稽ニ聖賢之訓一。士苟有レ得ニ於此一。亦可ニ以爲一ニ成人一矣。

○右、士規七則は、約して三端となす。曰く、志を立て以て萬事の源となす。交を擇び以て仁義の行を輔く。書を讀み以て聖賢の訓を稽ふ。士、苟此に得ること有らば、亦以て成人たるべし。

〔摘解〕三端＝の端は「蒭」といふ意味である。何事も此の「蒭」があつて、そ

立レ志以爲ニ萬事之源一

こで遂に完全の域に達するのである。例へば樹木の種子が、はじめて萌芽を發したときは、極めて微小なるものであるけれども、漸次成長して、後には棟梁の材となるやうなものである。故に三端といへば、「三ッノキザシ」即ち、「三ッノ大本（おほもと）」といふことになるのだ。こゝに擧げられたる立志・擇友・讀書の三箇條は、人生の行爲の大本である。○立レ志＝心の向ふ所を一定して動かさぬこと。心の方向が定まらないと、何事も成就することは出來ぬ。○擇レ友＝友として交際する人を選擇すること。選擇して良い友と交らなければ、仁義の道に進むことは出來ぬ。○訓＝は「ヲシフ」とも、「イマシム」ともよむ。この字の「ヲシフ」は「敎」の字と大抵は同じいけれども、「敎」は「訓」よりも少しく意味がひろい。「訓」は言葉のうへで「ヲシフ」る意味の字である。また「馴」の字のやうに「ナラス」といふ意味もあるので、「平素（ふたん）をしへこんでおく」といふことになるのだ。

〔通釋〕右に擧げたる士規七則は、之を約（つづ）めて三の大本とすることが出來る。それは何々であるかといへば、(1)心の向ふ所を一定して、萬事の本源とすること。(2)交るべき友を選擇して良友と親（したし）み、而して仁義の行（おこなひ）を進めてゆくやうに互にたすけあふこと。(3)書物を讀んで、而して聖人・賢人のをしへを稽（かんが）へあはせて、現在の場合に引きくらべてゆくこと。これだけである。士たるもの苟（もし）も此の點において會得することがあるならば、其の人は亦、十分に出來あがつた人だと云つてもよいであらうと思ふ。

の以（◎）は、而（◎）の字と同じく接續詞として用ゐてあるのだから「志を立（◎）てて萬事の源となす」といふやうに、（◎）てとよんでもよいのである。

格言

○君子以レ文會レ友。以レ友輔レ仁。（論語）

○君子は、文を以て友を會し、友を以て仁を輔く。

〔通釋〕君子は、學を講明するために、友人を會して相みがき、以て益〻道理を明にし、廣く友人の善を取つて己の仁を輔け、以て日々に其の德を進めてゆくやうにするものである。

○善不レ積不レ足二以成一レ名。惡不レ積不レ足二以滅一レ身。小人以二小善一爲レ无レ益、而弗レ爲也。以二小惡一爲レ无レ傷。而弗レ去也。故惡積而不レ可レ掩。罪大而不レ可レ解。（周易）

○善も積まざれば、以て名を成すに足らず。惡も積まざれば、以て身を滅すに足らず。小人は小善を以て益无しとして、爲さゞるなり。小惡を以て傷ること无しとして、去らざるなり。故に惡積みて掩ふ可からず。罪大にして解く可からず。

〔摘解〕无＝の音は「ブ」又は「ム」であつて、「無」と音も意味も同じ字である。

○掩＝の音はエンであつて、「オホフ」とか「トヅ」とか「ヤム」とかよむ字である。「遮り隱ス」こと。

〔通釋〕善い事でも惡い事でも、次第に積みかさなつて大きくなるものである。善い事でも幾たびも之を積まなければ、以て美名を成すには足らない。惡い事でも、次第に積み重らなければ、以て其の身を滅すまでには至らない。

然るに愚なる人は、小い善事を以て益なしと思うて之を行はず、小い悪事を以てさしつかへの無いことゝして、之を去らない。故に小い悪事が次第に積んで之を遮りかくすこと能はざるやうになり、大罪に陥りて之を解き去ることの出來ぬやうになるのである。

無手勝流

○塚原卜傳。常陸塚原人。父曰二土佐守一。學二劍法於下總人飯篠長意一。擊刺妙二天下一。卜傳繼二箕裘一。仗レ劍周二遊諸州一。嘗東歸。過二近江一。上二湖舟一。見二六七客一。中有二一士人一。狀貌猙獰。鬚髯繞レ面。自謂精二武伎一。天下無レ敵。卜傳抱レ膝坐睡。如二不レ聽者一。士睥睨曰。吾子亦佩レ刀。盍一言。卜傳徐曰。僕之伎與レ君異。不レ求レ勝レ人。欲不レ敗耳。士作レ色曰。子術何名。曰無手勝流是也。所レ佩何用。曰是斷二私心一。非レ斬レ人也。士益怒曰。子徒手敵レ我耶。曰可。士呼二舟人一上レ岸。卜傳遙指二一洲一曰。岸上格鬬或傷レ人。請於レ彼。乃命舟近レ洲。士躍起上レ陸。拔レ劍麾曰。客來客來。卜傳脫レ刀付二之舟人一。奪二其棹一一盪。舟開去レ岸數丈。大笑曰。無手勝流是矣。

○塚原卜傳は、常陸塚原の人なり。父は土佐守と曰ひ、劍法を下總の人飯篠長意に學び、擊刺天下に妙なりき。卜傳は箕裘を繼ぎ、劍に仗りて諸州を周遊せり。嘗て東に歸らんとして近江を過ぐるとき湖舟に上り、六七の客を見る。中に一士人あり狀貌猙獰にして、鬚髯面を繞れり。自ら謂へらく、「武伎に精しく、天下に敵無し」と、卜傳は膝を抱きて坐睡し、聽かざる者の如

し。士、睥睨して曰く、吾子も亦刀を佩ぶ。何ぞ一言せざるか」と。卜傳徐に曰く、「僕の伎は君と異なり。人に勝たんことを求めず。敗れざらんことを欲するのみ」と。士、色を作して曰く、「子の術は何と名づくるか」と。曰く、「無手勝流是れなり」と。佩ぶる所は何の用ぞ」と。曰く、「是れ私心を斷つなり。人を斬るに非ざるなり」と。士益々怒りて曰く、「子は徒手にて我に敵するか」と。曰く、「可なりと。士、舟人を呼びて岸に上らんとす。卜傳遙に一洲を指して曰く、「岸上の格闘は、或は人を傷けん。請ふ、彼に於てせん」と。乃ち舟を命じて洲に近づかしむ。士、躍り起ちて陸に上り、劍を抜きて麾きて曰く、「客來れ、客來れ」と。卜傳刀を脱して之を舟人に付し、其の棹を奪ひて一盪すれば、舟開きて岸を去ること數丈なり。大に笑ひて曰く、無手勝流は是れなり」と

〔摘解〕擊剌＝「擊ち殺すこと」をいひ、又は「擊ち殺す術」をもいふ。茲では「うち殺す術」の意味である。○剌は「サス」とか「コロス」とか、其の他、用ゐやうによつて種々によむ字である。○繼ニ箕裘一＝父祖ノ業ヲ承ケツグこと。禮記の學記篇にある「良冶之子、必學レ爲レ裘。良弓之子、必學レ爲レ箕」。といふ語から出たのである。其の意味は、「鑄物を上手にする者の子は、其の父が硬き金屬を鎔解して種々なる器具を作るを見て、先づ軟かなる毛皮を以て裘を爲ることを學び、弓をよく作る者の子は、其の父が剛き木を撓めて箕を作ることを學び、いづれも自然に其の父にならふやうになる」といふことである。○仗レ劍＝劍によりすがること

「蓋一言」の蓋は、「カフ」といふ音で「何不」の二字を書いたのと同じことであるから、「何ぞ……ざる」とよむ。故に「蓋一言」は「何不一言」と書いたのと、其の意味は同じことである。

と。劍を唯一のたよりとすること。劍に一身をまかすること。仗は又杖と同じく用ゐる字であるから、「劍を仗く」とよんでも、「劍を仗として其れにたよる」といふ意味になつて、「劍に仗る」とよむのとつまりは同じことになるのだ。○猙獰＝みにくいこと。猙も獰も「惡」といふ意味。○鬚髯＝ひげ。鬚は「クチヒゲ」。髯は「アゴヒゲ」。○武伎＝武術、伎は「ワザ」といふ字。○睥睨＝ヨコメニ、ニラムこと。○作レ色＝面に怒の色を生ずること。○私心＝私慾の心。○一盪＝一たび推すこと。盪は「推す」とか「動す」とかいふ意味の字。○付＝は「畀ふ」、「授く」などとよむ。「手ワタシニスル」こと。

〔通釋〕塚原卜傳は、常陸の塚原の人であつて、其の父は土佐守といふ人で、劍術を下總國の飯篠長意といふ人に就いて學んで、擊劍のわざに於いては、天下に上手といはるゝほどの人であつた。卜傳は親ゆづりの業を承けついて、唯一劍に身をまかせて、國々を周く遊んであるいた。この卜傳が、いづぞや西の國の方から關東に歸らうとして、近江國を過ぐるときに、琵琶湖に浮べた舟に乘ると、其の舟には六・七人の客が乘りあはせて居たが、其の中に一人の士があつて、容貌が如何にも惡しくて、鬚髯は面にあまねく生えて居た。其の士が自ら謂ふには、「自分は武術に精しくて、天下に誰も我に敵するほどの者はない」とのことであつた。時に卜傳は膝を抱いて坐睡して、聽かないやうな樣子であつた。すると其の士は卜傳をよこめに睨んで、「吾子も亦刀を佩して居るから士であらうが、なぜ一言武藝の話を爲ないのか、少しぐらゐは話をしてもよいではないか」といつた。卜傳は徐に之にこたへて、「僕のわ

◎仗は「ヌク」とよむ。「ヒキヌク」こと、「重なつて居るものを端からぬき出す」といふ意味、又は「城を攻め取る」といふ意味ともなる字。◎脫は「ヌク」とよむ。「マルヌギ」をすること。「カコミナヌケ出ヅル」ことにもいふ字。

ざは君のとは異つて居る。僕は、人に勝ちたいといふことを思はないで、人に敗けないやうにしたいと思ふだけである」といふた。そこで士は顔面に怒の色をあらはして、「おまへの術は何流であるか」といへば、卜傳は「無手勝流といふのが僕の流儀である」とこたへた。士が「然らば其の佩びたる刀は何の用にたつかといへば、卜傳は「これは我が私慾の心を斷ちきるに用ゐるのである。人を斬るために佩びて居るのではない」とこたへた。士は益〻怒つて、「おまへは徒手で我に敵することが出來るか」といへば、卜傳は「それは出來る」とこたへた。士は舟人を呼んで舟を著けさせて岸に上らうとするから、卜傳は遙に一の洲を指して、「岸の上の擊ち合ひは、或は人を傷くるやうなことがあるかも知れない。どうか彼處の洲で戰ひたい」というて、そこで舟を其の方へ向けて漕ぐやうに言ひつけて、其の洲に近づかせた。士は飛び起つて陸に上り、劍を抜きはなち、卜傳を麾いて、「客來れ、客來れ」と促した。卜傳は其の佩びたる刀を脫いてしまつて、之を舟人にわたし、舟人の持つたる棹を奪ひ取つて一たび推せば、舟は放れて五・六丈も岸から去つた。卜傳は大に笑つて、「無手勝流はこんなものだ」というた。

爲レ善最樂說

○竹絲管絃果樂乎。吾見レ聾ニ其耳一也。綵綺文錦果樂乎。吾見レ盲ニ其目一也。膏粱旨甘果樂乎。吾見レ爽ニ其口一也。酒爛ニ其腸一。而色戕ニ其性一。狗馬弋獵暴ニ其氣一。宮室臺榭惰ニ其體一。凡人之所ニ趨以爲一レ樂者。吾意未レ見ニ其爲一レ樂

也。至ニ於爲レ善之樂一。則異レ於レ此。爲レ子而孝。竭ニ其力一而勞ニ其心一。爲レ臣而忠。致ニ其身一而厲ニ其精一。凡其所ニ以爲一レ善者。殆如レ見ニ其可一レ苦。而未レ見ニ其爲一レ樂者一也。然而孝ニ於親一則親樂。忠ニ於君一則君樂。推ニ諸家一則家樂。施ニ諸國一則國樂。措ニ諸天下一則天下樂。夫天下皆樂。我何獨不レ樂。盎然其若ニ春煦一也。熙々然其若ニ百鳥和而群芳敷一也。嗚呼。是皆爲レ善之推也。而其爲レ樂果爲ニ何如一哉。東平王蒼語レ人曰。爲レ善最樂。庶下其有ニ見於此一歟。

○絲竹管絃は果して樂しきか。吾れ其の耳を聾するを見るなり。綵綺文錦は果して樂しきか。吾れ其の目を盲するを見るなり。膏粱旨甘は果して樂しきか。吾れ其の口を爽ふるを見るなり。酒は其の腸を爛らして、色は其の性を戕ひ、狗馬弋獵は其の氣を暴し宮室臺榭は其の體を惰にす。凡そ人の趨さて以て樂と爲す所の者は、吾れ意ふに未だ其の樂たるを見ざるなり。善を爲すの樂に至りては、此に異なり。子と爲りて孝に、其の力を竭して其の心を勞す。臣と爲りて忠に、其の身を致して其の精を厲す。凡そ其の善たる所以の者は、殆ど其の苦む可きを見て未だ其の樂たるを見ざる者の如し。然れども、親に孝なれば親樂み、君に忠なれば君樂み、之を家に推せば家樂み、之を國に施せば國樂み、之を天下に措けば天下樂む。其れ天下皆樂まば、我れ何ぞ獨樂まざらん。盎然として其れ春煦の若きなり。熙々然として其れ百鳥の和して群芳の敷くが若きなり。嗚呼、是れ皆善を爲すの推なり。而して其の樂たること果して如何と爲すか。東平王蒼、

人に語りて曰く、「善を爲すこと最も樂し」と。其れ此に見ること有りしに庶からんか。

〔摘解〕絲竹管絃＝は、すべての樂器のことをいふ。「絲」は、琴の如き絃をかけて鳴らすものをいふ。「絃」もイトとよむ字で、やはりこれも琴の如きものをいふ。「竹」と「管」とは同じ意味で、笛の類をいふ。そこで「絲竹管絃」といへば、「音樂」といふ意味になるのである。○聾＝は、ツンボとよむ字で、「聾す」といへば、「ツンボニス」といふことである。○綵綺文錦＝の「綵」は「アヤ」とか「イロドル」とかよむ字で、「綺」は「アヤギヌ」とよむ字である。「文」は「アヤ」とよむ字で、「錦」は「ニシキ」であるから、「文錦」といへば、「アヤあるニシキ」といふことである。○盲＝は、「メクラ」とか、「クラシ」とかよむ字であるから、「盲す」といへば「メクラニスル」こと、「クラクスル」ことである。○膏粱旨甘＝の「膏」は「肉ノ肥エタルモノ」をいひ、「粱」は「米ノ粒ノ大キイモノ」をいふ。そこで「膏粱」といへば「肥エタル肉、粒ノ大キイ良イ米」といふことになる。「旨」は「ウマシ」とよむ字で、「甘」は「アマシ」とよむ字であるから、「旨甘」といへば「ウマイモノ」といふことになるのだ。○爽＝は「サウ」といふ音であつて、「サワヤカ」といふ字であるが、こゝは「忒」と同じく「タガフ」とよむべき場合である。老子の書に、「五味使ニ人口爽ヘ」といふことがある。食物の味をマチガヘしむることである。○弋獵＝は、禽獸ヲカルこと。「弋」は「矢ノサキニ絲ヲツケテ鳥ヲトル」ことである。○臺榭＝の「臺」は「ウテナ」とよむ字で、「土ヲ高ク

然而＝は、上と下とを結びつくる接續詞であつて、下の事柄が上の條件と相反することをあらはす場合と、さうでない場合との二樣の用ゐかたがある。其の下の事柄が上の條件と相反することをあらはす場合には「然れども」とよみ、相反せざることをあらはす場合には「然而して」とか、又は「然り而うして」とかよむのである。今この文に於ては、上下その意味の相反することをあらはす場合であるからして。「然而」の二字を「しかれども」としたのである。

積ミアゲテ其ノ上ニ建テ、ソコカラ四方ヲミワタス」やうに出來て居るもの、「棚」は「ヤネのあるウテナ」をいふ。○厲＝の音はレイであつて、こゝでは「勵」と同じ意味に用ゐてあるのだ。故に「厲精」は「勵精」と同じことで、又「奮勵」を「奮厲」とかくこともある。○推ニ諸家ニ＝の諸は、前にも出て居たとほり、之於又は之乎と同じことで、施ニ諸國ニの諸も、措ニ諸天下ニの諸も、やはり同樣である。○推は「次第ニ他ヘ及ボシテユク」ことである。施は「ホドコシ惠ム」といふ意味ともなり、「ヒロク行フ」といふ意味ともなるが、こゝでは「ヒロク行フ」といふ場合である。措の音はソであつて、「オク」とよむが、こゝでは「施す」とか「布く」とかいふやうなる意味に用ゐてあるので、敷物を地に布くときのやうに、次第に廣くひろげてゆくことである。

故に「推す」といひ、「措く」といふやうに、別々の語を用ゐてあるのは、文章の美を失はぬためからのことで、三語ともに、意味はつまり同じことである。○盎然＝盛なるありさま。○春煦＝暖い春の氣、「煦」は「アタヽカサ」とも「日光」とも解する字である。○燠然＝あたゝかいありさま。「燠」は「アタヽカナリ」とか「アッシ」とかよむ。○暖噓＝口を開いて、しづかに吐き出すときの、暖い息。「噓」は「フク」とも「ハク」ともよむけれども、「吹」を「フク」とよむのとは其の意味がちがふので、「吹」は「急にふき出す」こと、「噓」は「口を張りあげて緩かに吹き出す」ことである。○熙々然＝やはらぎたるありさま。○群芳＝多くのかをりよき花。「芳」は「カヲリノアル花」のこと。「カヲリ」とも「ニホヒ」ともよむ。○東平王蒼＝は、

後漢の光武帝の子であつて、姓は劉といひ、蒼はその名である。

〔通釋〕琴や笛の如き樂器をならし、音樂をして樂とするのは、其は果して樂しいことであるだらうか。吾れは其の音樂が、これを聽いて樂とする人の耳をツンボにして、あたりまへの言葉が耳に入らぬやうにしてしまふといふことを知るのである。美しいアヤやニシキを身にまとふことは、果して眞の樂しいことであるだらうか。吾は其の華やかなるアヤやニシキの色が、其れを用ゐる人の目をくらまして、あたりまへの色が正しく目に映らぬやうにしてしまふ、即ち目を迷はしてしまふといふことを知るのである。肥えたる肉や上等の米を食ひ、美い味に飽くことは、其は果して樂しいことであるだらうか。吾れは其の美味が、それを食する人の味覺を變じてしまつて、普通の物の味をまちがへしむるものであることを知つて居る。酒を飮むことは、人の樂しいとすることのやうであるけれども、其の酒は、それを飮む人の腸を爛らしてしまふ、色も人の耽りやすきものであるけれども、其の色は、それを漁する人の性質をうちこはして、身を持ちくづすやうにしてしまひ、犬を連れ馬を驅り、禽獸をかることは、樂しいことのやうではあるが、其のかりは、それを爲る人の氣性をそこなうて、無慈悲なる人にしてしまひ、立派な家に住み、高きウテナに景色を賞することも、其の樂を恣にする人は、忽にして其の身體を惰弱にして何事のヤクにもたゝぬやうになつてしまふものである。してみれば、凡そ人々が趨いて以て樂とする所の者は、吾れには不思議にも、其の樂であるといふことがわからないのである。然るに「善を爲

飛の音は「シャウ」であつて、「ソコナフ」とよみ、暴の音は「バウ」であつて、これも「ソコナフ」とよむ字であるが、飛は「ウチコハス」ことであり、暴は「ムゴクスル」こと、「無慈悲ニスル」ことである。

すること」の樂に至つては、前に擧げた所の樂といふのとは異つて居るのである。これは即ち、子となつては親に孝に、其の力のあらんかぎりを竭して、其の心を能くはたらかせて、行き屆かぬ所のないやうにと心がけ、臣となつては君に忠に、其の一身を君にさゝげて、其の精力を勵まし、出來るかぎり勉めて能く事ふる等のことであつて、これを稱して「善を爲す」といふのである。而して此の如く、凡そ「善を爲す」といふ事柄は、殆ど其れは苦まねばならぬことだといふやうな所が目について、未だ其の事が樂であることは目につかないやうである。しかしながら其れは苦ではなくて樂であるに相違ないので、子として親に孝行をすれば親はそれを樂まれ、臣として君に忠を盡せば君はそれを樂まれ、これを一家に推し及ぼせば一家悉く樂み、これを一國に施し廣むれば國人皆樂み、これを天下に布きひろむれば天下のこらず樂むのである。其れ天下皆樂むならば、自分だけが何故ひとり樂しくないことがあらうか。其の樂をたとへていうてみると、まことに盛にして春の氣の暖きが如きおもひもあり、あたゝかにして口を開いてしづかに吐き出すときの暖い息のやうにもあり、將又和ぎ和いて百鳥の聲おもしろく囀るが如く、而して又多くのかをりよき花の一面に咲き充ちたるが如くもある。嗚呼、これは皆善を爲すことの廣く推し及ぼさるゝよりして生ずる所のものである。而して其の善を爲す人にとりての樂たること果してどのやうであるか。限なき樂であるだらう。後漢の東平王蒼が、人に語つて「善を爲すことが最も樂しい」といはれたことがあるが、東平王は其れ前に擧げた點に氣がついて居られた

と申しても、先づ以て宜しいであらうか。

鍛工助弘傳（一）

○鍛工助弘稱ニ越前守。初名直助。凡其所ニ鍛錬一亡レ論ニ刀劍槍矛一。銳利堅剛。不ニ惟昆刀切レ玉、人皆稱ニ新刀正宗一。蓋正宗者古名工。以レ鍛レ刀著レ者也。初赤穗城主淺野氏臣。有ニ小野寺十內一。家甚貧困。一日與ニ諸僚一會ニ于朋友宅一。衆士各〻品ニ評其佩刀眞贋一。藩老大野九郎兵衞亦在レ座焉。善甄ニ別刀之所レ出鄉貫一。曰相州曰備前。百不レ錯レ一。擧座歎稱。服ニ其明眼一。最後及ニ十內佩刀一。刀鈍而鞘剝。大野嘲哂。極レ口罵ニ其不武一。十內銜レ之不レ形ニ辭色一。

○鍛工助弘は、越前守と稱し、初の名は直助といへり。凡そ其の鍛錬せし所は、刀劍槍矛に論なく、銳利堅剛なること惟に昆刀も玉を切るが如きのみならず。人皆新刀正宗と稱せり。蓋し正宗は古の名工にして刀を鍛ふるを以て著れたる者なり。初め赤穗の城主淺野氏の臣に、小野寺十內といふものあり、家甚だ貧困なりき。一日諸僚と與に朋友の宅に會す。衆士各〻其の佩刀の眞贋を品評す。藩老大野九郎兵衞も亦座に在り。善く刀の出でし所の鄉貫を甄別す。曰く相州、曰く備前と。百に一をだに錯らず。擧座歎稱して、其の明眼に服す。最後に十內の佩刀に及ぶ刀鈍にして鞘剝げたり。大野嘲りて、口を極めて其の不武を罵る。十內之を銜めども、辭色に形はさず。

〔摘解〕昆刀＝は、古昔支那周穆王の時に、昆吾といふ國から出た名刀であつて、此の名刀を以て玉を切ると、其の玉はさながら泥を切るやうに善く切

れた、というてある。○眞贋＝眞物（ほんもの）であるか贋物（にせもの）であるか。「贋」はまた「僞」とも書く。○藩老＝藩の家老。大野九郎兵衞は、大石良雄と其の秩が同じであつた。○甄別＝メキキすること。「甄」は「明（あきら）かに見ぬく」といふ意味。○鄉貫＝は「鄉里の戸籍」といふことであるが、この所では「鄉里」といふほどの意味に用ゐたのである。○嘲晒＝アザワラヒすること。「嘲」の音は「タウ」又は「テウ」で、「アザケル」といふ字。「晒」の音は「シン」で「大にわらふ」かと、「あざけりわらふ」とかいふ字。○銜＝の音は「ガン」で、馬にふくまする「クツワ」といふ字であるが、又は「フクム」といふ動詞ともなる、ネニモツことである。

〔通釋〕鍛工（かぢや）の助弘は、越前守と稱へて、初（はじめ）は直助といふ名であつた。凡そ

この助弘がきたへ上げたものは、刀劍にしても槍矛（やりほこ）にしても、其の何物たるを問はず、いづれも其の切れあぢがスルドク、且又堅くツヨイこと、惟（ただ）に昆吾の名刀を以て玉を切るが如くによく切れるといくらゐでなく、其れよりも尙一層よく切れるので、人は皆この助弘の鍛へた刀のことを稱して新刀正宗というた。おもふに正宗は古の名高い鍛工であつて、刀を鍛へ作ることを以て、世に著れた人であつたから、そこで右のとほりにいうたのであらう。抑〻この助弘が斯くも名工となつた其の起原をいふてみれば、初め赤穗の城主淺野氏の家來に小野寺十內といふ人があつて、其の家は甚だ貧困であつた。この十內が、或日多くの役人仲間と與に、友だちの宅に會合した。そのときの士たちは、各〻其の腰に佩びたる刀の眞物であるか贋物であるかといふことに

ついて品評をした。藩の家老職たる大野九郎兵衛も亦其の座に在つた。この大野は鑒定が上手であつて、刀の眞贋を辨ずるとは勿論、其の刀の出た所の郷里をも善く判定した。そこで大野が衆士の佩刀を鑒定して「これは相州ものだ」とか、「これは備前ものだ」とかいふに、百の中で一でも錯らない。座中の人悉く稱めたゝへて、大野の明なる鑒識に感服して居る。かくて大野は最後に十内の佩刀を鑒定することになつた。すると十内の佩刀は鈍くして、鞘は剝げて居た。大野は之を見て嘲り哂ひ、惡口のかぎりを盡して、其の事に臨んで役にたゝぬことを罵つた。すると十内は之に對して、心の中には怒をふくんで居るけれども、言葉にも顏色にもあらはさなかつた。

鍛工助弘傳（二）

○時直助爲十内家奴。隔壁聞之。深恚其亡狀。切齒曰。老奴不遜。敢辱主公。所不雪此怨者。不復生見人。即乞暇。陽言曰。願得歸省郷里。十内聽之。乃結束而發。草行露宿。具嘗艱苦。遂達于浪華片町。詣鍛工近江宅。近江者攝州名工。世呼曰神刀鍛冶。直助彷徨其門外。家人怪間其所自。曰。僕有志願在焉。欲見主翁面請之。家人白之近江。近江延而見之。直助請爲門子。辭氣激切。一若有素望者。乃憫而舍之。直助權爲其家奴。操作之暇。一意攻其業。手試運鎚法。丁丁作響。寢則叩其枕函。食則打其椏碗。終夜不止聲。家人病之。毀言日至於近江之耳。

近江舎而弗レ問。如レ此者三年。業大進。

○時に直助は十内の家奴たり。壁を隔てゝ之を聞き、深く其の亡状を恚り、切歯して曰く、老奴不遜にして、敢て主公を辱む。此の怨を雪がざる所あらば、復生きて人を見じと。即ち暇を乞ひ、陽りて言ひて曰く、願はくは郷里に帰省するを得んと。十内之を聴す。乃ち結束して発し、草行露宿し、具に艱苦を嘗め、遂に浪華の片町に達し、鍛工近江の宅に詣る。近江は摂州の名工にして、世に呼びて神刀鍛冶と曰ふ。直助其の門外に彷徨す。家人怪みて其の自る所を問ふ。曰く、僕は志願の在る有り。主翁に見えて面のあたり之を請はんと欲すと。家人之を近江に白す。近江延きて之を見る。直助、門子と為らんと請ふ。辞気激切にして、一に素望ある者の如し。乃ち憫みて之を舎す。

直助権に其の家奴と為り、操作の暇には、一意其の業を攻め、手に運鎚の法を試み、丁々として響を作し、寝ねては其の枕函を叩き、食ふときは其の椀を打ち、終夜聲を止めず。家人之を病み、毀言日々に近江の耳に至る。近江舎きて問はず。此の如きこと三年にして業大に進めり。

〔摘解〕恚＝の音は「イ」で、「イカル」とか「ウラム」とかよむ字である。「ウラミイカル」、「クヤシガル」といふ意味。○亡状＝は「無禮」といふ意味。「亡」は「無」に同じ。○不遜＝デスギテタカブルこと。「遜」は「ユヅル」ともよむ場合があるが、こゝでは「シタガフ」とか「ヘリクダル」とかいふことになるので、「はりあはぬ」ことである。故に「不遜」といへば「はりあはぬ」ことの打消になるから、「デスギテ、人ト抗フ」ことになるのだ。○雪＝

「所レ不レ雪二此怨一者」は「此の怨を雪がざる所あらば」と読んだが、其の意味は、「この怨をはらさないことならば」といふことだからして、「所」を「トコロ」

は清くすること。辱を去つて心地よくすること。○陽＝は「佯」と同じく「イツハル」とよむ字で、「表面ニ其ノヤウナマネヲスル」こと。○歸省＝歸つて親の安否を問ふこと。○結束＝旅ノ支度ヲ整フルこと。○草行露宿＝人家の無いところに宿つてあるくこと、即ち「野宿」をすること。○彷徨＝さまよふ。往いたり反つたりすること。○素望＝平素からの願望。○辭氣＝モノ言ヒブリ。○激切＝甚シク急キ立チタルこと。○權＝は「實」でないこと。「假に」と同じ。○丁々＝「トン、トン」と音すること。○枕函＝マクラバコ。○椀＝食器。「椀」は「杯」と同字で、「羹を盛る器」のこと。

〔通釋〕其の時に直助は、十内の家の下男となつて居つたが、壁ごしに大野の罵る聲を耳にして、深く其の無禮を怨み怒つて、切齒をして曰ふには、「こ

とばかりよまないで「此の怨を雪がざること所ならば」とよんでもよいので、その方がむしろ穩當てあるのだ。

○不復云々といふのと、○復不云々とは、之を讀むときに、いづれも「復…ず」というて區別ぜぬけれども、「復不」と「不復」とは大に其の意味がちがふのである。例へば「不二復ヘ」といへば「爭フコトヲ復セヌ」といふことであるから、「前ニハ爭ウタケレドモ、コノタビハ爭ハヌ」といふのは、之を讀むときに、いづれも「復…ず」というて區別ぜぬけれども、「復不」と「不復」とは大に其の意味がちがふのである。例へば「不二復ヘ」といへば「爭フコトヲ復セヌ」といふことであるから、「前ニハ爭ウタケレドモ、コノタビハ爭ハヌ」といふ

のオヤヂメ、出スギたることを言うて、無遠慮にも我が主公を辱めたるか。此の怨をはらすことが出來ないならば、われは復と生きて人に顔をあはすまい」と。早速、十内に暇を願ひ出で、表面には、「何卒、鄉里に歸して親の機嫌を伺はせて下されたい」と申し陳べた。十内は之を承知した。直助は、そこで旅裝を整へて出發し、野宿をして路を行き、どこまでも艱難辛苦を嘗めつくして、遂に大阪の片町に達し、鍛工津田近江守といふ者の宅に參つた。この近江守は攝津國の名高い鍛工であつて、世に「神刀鍛冶」といはれて居る人である。直助は其の近江守の門前に、ゆきつもどりつして居ると、家人が之を見て不思議におもひ、何處から來られたか。又何如なる仔細あつて其のやうにして居るかを尋ぬれば、直助は「僕は心の中に願望をもつて居る者で

ふ意味であるが「復不レ」といへば、「不ハヌ」といへば、「不ハヌ」といへば、「不ハヌ

坐臥佩服。不レ離二其側一。無レ幾有二報仇之事一。十內當夜帶二此刀一。斫二仇家門一。手斃二數人一。後十內與二同盟諸士一。同賜二自刀一。刀遂爲二泉岳寺遺物一。今歷二百餘年一。如レ發レ硎。

○直助　一日從容として、近江に謂ひて曰く、「生、師の門に在りて、提命を辱くすること、茲に三裘葛。頗る得る所あるを覺ゆ。願はくは師の一臂を假り、寸鐵を鍛ふることを得ば、志願達せん。敢て請ふ、幸に聽されんか否か」と。近江首肯す。直助大に悅び、乃ち齋戒すること七日。鍛鍊して一刀を作る。近江、鎚を執りて之を助く。刀成りて硎を加ふれば、神光、水の如く、古名刀と雖多く讓らざるなり。近江、嗟稱し、擧げて其の後を繼がしめ、女を以て之に妻し、冒すに己が姓を以てせしめ、號して津田越前守助弘と曰ふ。助弘、乃ち其の手づから鍛へし所の一刀を挈へ、東下して、舊主小野寺氏に詣りて寄贈し、且つ泣きて曰く、「此れ下奴が精神の凝結せし所、願はくは主公、此を以て昔日の汚辱を洗雪せられよ。庶はくは多年の志願を償ふに足らんか」と。十內、感喜し、爲に容を動かし、深く其の篤志を謝し、坐臥佩服して、其の側を離さず。幾も無くして報仇の事あり。十內當夜此の刀を帶び、仇家の門を斫り、手づから數人を斃せり。後十內同盟の諸士と與に、同じく自刀を賜はり、刀は遂に泉岳寺の遺物となり、今百餘年を歷れども、硎を發するが如し。

〔摘解〕從容＝ユッタリとして居ること。○提命＝丁寧親切なる敎をいふ。耳を提げて、面前で訓誨することであつて、詩經の「匪二アラズマノアタリスルノミニ面命一之、言

がおのづからきこえたのであつて、最初みづから耳をすましてきいたのではない。○「有」は「何々ガアリ」といふことで、「在」は「どこそこニアリ」といふことで、故に「有志願ガアリ」といふことで、「在」は「心ニアリ」と「胸中ニアリ」とかいふことである。

提ニ其耳一」とあるのに本づいたのである。○三裘葛＝は「三年」といふこと。「裘」は冬に着る「カハゴロモ」をいひ、「葛」は夏に著る「カタビラ」をいふ。○寸鐵＝小き刀物。○首肯＝ウナヅク。承諾すること。○齋戒＝は「モノイミ」で、飲みもの食ひものなどを愼み、汚穢に觸れないやうにして身體精神を淨くすることをいふ。○鍛鍊＝キタヘネル。なほ「レン」といふ音で、「チル」とよむ字に、「煉」もあれば「練」もあるが、「鍛鍊」といふときは、「鍊」の字でなくてはならぬ。○加レ砺＝砥石にかけて研ぐこと。「砺」は「砥石」といふ字。○嗟稱＝感心して稱めたゝふることである。此の「冒」といふ字は、「頭から布ば、其の姓を取つて之をかぶること。○冒＝頭に被ること。「冒レ姓」といへ帛を被つて目かくしをすること」を意味するので、「冒險」といへば、「見て居ては恐しくて進まれない危險なことを、目かくしをして進みゆく」といふ意味である。故に「冒」の下部は「目」であつて、「冒」と書くは誤字である。○挈＝の音は「ケツ」であつて、「ヒツサグ」とよむ。「持チテユク」ことである。故にまた「タヅサフ」ともよむ。○汚辱＝はぢ、けがれ。○動レ容＝容子を變ふること。○自刀＝みづから腹を割くこと。切腹。○發レ砺＝は「砺から、はなれたばかり」といふ意味。即ち「とぎたてたばかりのもの」といふこと。

〔通釋〕直助は、或日近江守にむかひて、「わたくしは、師の門下に居りまして、親切なる御をしへを受けまするが、こゝに三年になりましたが、わたくしのやうな者としては餘程の得る所のあることを思ひます。どうか少しばかりの御ちからを師に御かり申しまして、小き刀物をこしらふることが出

來ませうならば、わたくしの志願は、それで成就することであらうと存じます。そこで遠慮を致さずに、押しきつて御ねがひ申しますが、幸に此の儀を御聽届け下されませうか、下されますまいか」と申し出でた。近江守は、それを承諾した。直助は大に悦んで、乃で齋戒すること七日にして、鍛へ錬つて一刀を作つた。其の時には、近江守が鎚を執つて之を助けた。其の刀が鍛へ上げられて、それを砥石にかけて研いだところが、不思議と思ふほどに閃く光は宛も水の如く、古の名刀に比べても、其れほどには劣るまいと思はれた。近江守は甚しく感心して之をほめたゝへ、直助を擧げて自分の後を繼がせ、其の女を以て直助の妻となし、直助に名乘らしむるに自分の姓を以てして、津田越前守助弘と號づけた。助弘は、そこで、自分の手で作り上げた一刀を

持つて東國に下り、舊の主君たる小野寺氏に參つて、其の刀を進上し、且つ泣いて曰ふには、「これは下奴が精神の凝りかたまつて出來た刀でございます。どうか我が主公、之を以て昔日かの大野に受けたまうた汚辱を洗ひ雪めて下されよ。此くして下されたならば、下奴が多年の志願を償ふに足ることにもなりませう」と。十内は之れをきいて感じ且つ喜び、それがために容子をかへ、深く其の篤き志を謝し、坐する時にも、臥すときにも、常に身につけて居て其の側を離さない。それからして幾程もたゝぬうちに、報仇の事があつたが、十内は報仇の夜には此の刀を帶び、仇家の門を斫り破り、自ら數人を殺した。其の後に十内は同じく盟を立てゝ仇を報いた人々と與に、同じく切腹の命をうけて、其の刀は遂に泉岳寺に、遺物として傳はつて居るが、今は

百餘年を歴たけれども、其の神光のきらめくこと、宛も砥石をはなれたばかりの刀のやうである。

○三溪氏曰く。衆藝百工。所レ以名二于世一者。皆精神至誠所レ貫。加レ以二鍛錬之功一也。鐵工助弘。眇然一匹夫耳。特出二其至誠一。欲レ雪二主家之辱一。精神所レ注。竟獲二無比三尺一。以爲二異日報讎之用一。自レ非二鐵心石腸人一。安得レ鍛二錬此快刀一乎哉。

○三溪氏曰く、衆藝百工の、世に名ある所以は、皆精神至誠の貫く所にして、加ふるに鍛錬の功を以てすればなり。鍛工助弘は、眇然たる一匹夫のみ。特に其の至誠より出でて、主家の辱を雪がんと欲し、精神の注ぐ所、竟に無比の三尺を獲、以て異日報讎の用と爲せり。鐵心石腸の人に非る自りは、安ぞ此の快刀を鍛錬することを得んや。

〔摘解〕三溪氏＝は、作者みづからいふので、鍛工助弘傳は、菊池三溪氏の文である。三溪氏は名を純といひ、字を子顯といひ、三溪は其の號である。紀州の人で、明治二十四年に、七十三歳で歿せられた。○衆藝＝オホクノワザ。○百工＝モロモロの器物を作るタクミ。○精神＝タマシヒ。ココロ。○至誠＝マゴコロ。○眇然＝チヒサイこと。微々たるありさま。○匹夫＝なのみ男。○三尺＝は、「劒」のこと。「三尺」とは、劒の長さからしていふのだ。○異日＝は、こゝでは「後日」といふこと。「異日」は「他日」と同じく、現在を本として過去にも未來にもいふことが出來るのだ。○報讎＝カタキをトルこと。○鐵心石腸＝鐵の如き心、石の如き腸。これは「精神の堅固なること

とが、鐵石の如くなること」をいふのだ。

〔通釋〕三溪氏曰く、イロイロの技術工藝を業とするもので、世間に其の名の著はるゝやうになるのは、皆そのマゴコロの貫く所によるので、之に加ふるに、鍛へ錬ることの勉強を以てするからである。彼の鍛工助弘は、微々たる一人の男たるに過ぎないのである。それが特に至誠より出でて主家の辱をすゝぎよめたいと心がけ、其の精神の注ぐ所によつて、竟に世にも比ないほどの劒を手に入れて、後日かたきうちのときの用にたてた。精神の堅固なること、鐵石の如き人でなくては、どうして此のやうにきれあぢのよい刀を鍛へあぐることが出來ようか。

辱＝は「他ヨリはぢヲ受クル」こと、又は、「他ニはぢを與フル」ことで、「恥」とは異なるのだ。「恥」は「己が心ニはぢることがむるる」ことである。故にこの二字を名詞として用ゐるときは「辱」は「他ヨリ受ケタルはぢ」で、或は「ばづかしめ」ともよむ。

「恥」は「己が心ニトがムルはぢ」である。

快字說

○好レ快惡レ不快一人之常情也。何謂レ快。所レ聽適レ耳。所レ覩且食一。適ニ鼻與レ口。四體百骸。莫レ所レ不レ適。謂ニ之快一也。然是身之快。非ニ心之快一。何謂ニ心之快一。惡レ惡如ニ惡臭一。心則快矣。好レ善如ニ好色一。心則快矣。心苟不レ快。則身所ニ以爲一レ快者。必歸ニ於不快一矣。然則快之本在レ心。而不レ在レ身。故快字從レ心。君子先ニ心之快一。而後ニ身之快一。小人肆ニ身之快一。而不レ顧ニ心之快否一。故心益不快。而身之快來隨而亡矣。君子小人之辨。在レ決ニ其所レ快之先後一而已。故快字又從レ夬。

○快を好み不快を惡むは、人の常情なり。何をか快と謂ふ。聽く所、耳に

適ひ、視る所、目に適ひ、齅ぎ且つ食ふ所、鼻と口とに適ひ、四體百骸、適はざる所莫きは、之を快と謂ふなり。」然れども是れ身の快にして、心の快に非ず。何をか心の快と謂ふ。惡を惡むこと惡臭の如くすれば、心は快なり。善を好むこと好色の如くすれば、心は快なり。心苟も快ならずは、身の快と爲す所以のもの、必ず不快に歸せん。然らば快の本は心に在りて、身に在らず。故に快字は心に從ふ。」君子は心の快を先にして、身の快を後にす。故に心常に快にして、終身身の快を失はず。小人は身の快を肆にして、心の快否を顧みず、故に心益々不快にして、身の快も亦隨ひて亡ぶ。君子小人の辨は、其の快とする所の先後を決するに在るのみ。故に快字は又夬に從ふ。

〔摘解〕常情＝平生のこころもち。○四體＝兩手兩足。○百骸＝身體すべてをいふ。「骸」は「ホネ」といふ字。○夬＝の音は「クワイ」で、「ワケサダム」といふ意味。

〔通釋〕快いことを好み、快くないことを惡むは、人の平生のこころもちである。然らば其の「快い」とは如何なることかといふに、聽く音聲は耳に面白く聽きなされ、視る物は目に面白く見え、齅ぐ物は鼻に適ひ、食ふものは口にかなひ、手といひ足といひ、身體すべての部分といひ、何れも適はざる所のないのを「快」といふのである。』然れども、右にいふやうの事は是れ肉體的の「快」であつて、精神的の「快」ではない。然らば「心の快」とは如何なるものかといふに、惡をにくみきらふこと臭いにほひを惡むが如くすれば、心は「快」である。善を好むこと美しい色を好むが如くすれば、心が若も

本文に「所レ聽適レ耳。所レ視適レ目。所レ齅適レ鼻。所レ食適レ口」と書いたのは、一所レ聽適レ耳。所レ視適レ目。所レ齅適レ鼻。所レ食適レ口」と書いたのと、勿論その意味は同じことであるが、かくては文が單調になつてしまふから、やはり本文のやうに書い

「快」でないとするならば、身の「快」とするやうのものは、必ず不快になつてしまふであらう。然らば「快」の本は精神に在つて、身體には存在しない。故に「快」といふ字は「忄＝夬」に從つて書いてある。』德の備はつた立派な人は、精神上の快を先にして、身體上の快を後にするものである。或に君子の心は常に「快」であつて、一生涯にわたつて身體上の快をも失はない。心の狹い邪な人は、肉體的の「快」を思ふがまゝにして、精神的に「快」であるか「不快」であるかを顧みない。故に小人の心は益々「不快」であつて、身の快も亦隨つて亡くなつてしまふものである。君子と小人との區別は、其の「快」とする所の先後を決するにあるだけのことで、精神上の「快」を先にして身體上の「快」を後にする人ならば君子であつて、之に反對の人ならば小人である。故に「快」

て、文に變化をもたせなくてはならぬ所である。些細な事ではあるけれども、文を作らうとするものは、右の如きに所も注意をしなくては、立派な文を作り出すことは出來ない。

といふ字は又「夬」に從つて書いてある。

雞僧三條

○太公與二諸老臣一話。問曰。汝等聞二雞僧之話一乎。皆曰。未也。昔有二山衲一迎二雞僧於里一。晨夕以供二使役一。一日雞僧逃歸。泣訴二其父一曰。兒既出家。艱苦固其所レ甘。但師之遇レ我甚無狀。殆有二不レ可レ堪者一。其一。師每使二余剉一其頭一。偶一誤レ刀見レ血。則鞭撻直下。其二。每二晨起擂一茶。師瞋二研法不一レ精。呵責無レ不レ至。其三。余每二內逼而起一。師冷眼送レ之曰。汝又復上レ厠乎。父聞而怒。走往見二山衲一曰。賤兒久辱二師恩一。今有二不レ得レ已之事一。敢請受レ兒以歸。山衲察二其辭色一。徐叩以レ故。乃曰。兒告レ吾云云。山衲曰。是不レ可レ不レ辨。其剃レ頭。

則渠既圓二其頂一。薙髪之勞。不レ可レ委二諸人一。故我借二吾頭一。以爲二學レ刀之地一。今則至二自剃一其頭一矣。獨及レ剃二余頭一。故意誤レ刀。創痕縦横。其擂レ跋。則凡不レ問二上レ厠。則本寺新造二一圊一。獨以レ需二縣吏來宿之用一。渠利二其近且淨一。毎レ便輒往。禁レ之不レ止。言未レ畢。父拜謝。伏地曰。小人不レ知二師之厚誨如レ此。徒聽二兒言一。以疑レ之。慚悔之極。無二穴可レ入耳一。是雖二一場話説一。然自二諸老奉行一。以至二監察諸有司一。苟有二治レ人之責一者。皆不レ可レ不レ留二意於レ此。否則偏聽誤レ人。忠邪易レ地。不レ爲二雛僧之父一者幾希。汝等其牢記勿レ忘。

○太公、諸老臣と話し、問うて曰く、「汝等、雛僧三條の話を聞けりや」と。皆曰く、「未し」と。昔、山衲あり、雛僧を里より迎へて、晨夕以て使役に供せり。一日雛僧逃げ歸り、泣いて其の父に訴へて曰く、「兒既に出家せり。艱苦は固より其の甘ずる所なり。但師の我を遇すること甚だ無狀にして、殆ど堪ふ可からざる者あり。其の一は、師毎に余をして其の頭を剃らしむるに、偶一たび刀を誤りて血を見れば、鞭撻直に下る。其の二は、晨起して跋を擂る毎に、師、研法の精ならざるを瞋り、呵責すること至らざる無し。其の三は、余内遍りて起つ毎に、師、冷眼にて之を送りて曰く、汝又復厠に上るかと」。父聞いて怒り、走り往きて山衲を見て曰く、「賤兒久しく師の恩を辱くす。今已むを得ざる事あり。敢て請ふ、兒を受けて以て歸らん」と。山衲其の辭色を察し、徐に叩くに故を以てす。乃ち曰く「兒吾に告ぐること云々」と。其の頭を剃るは、渠既に其の頂を圓にす。

薙髪の勞は、之を人に委ぬ可からず。故に我は吾が頭を借して、以て刀を學ぶ地と爲せり。今は自ら其の頭を剃るに至れり。獨、余が頭を剃るに及びては故意に刀を誤り、創痕縱横なり。其の豉を擂るは、凡そ緇素の家を問はず、豉を擂るには必ず研槌を以てす。渠は獨木杓を以てす。故に隨ひて研れば隨ひて折れ、毎晨二三折を下らず。其の厠に上るは、本寺新に一圊を造り、獨以て縣吏來宿の用を需つ。渠は其の近くして且淨きを利とし、便毎に輒ち往き、之を禁ずれども止まず」と。言未だ畢らざるに、父拜謝して、地に伏して曰く、「小人は師の厚誨此の如くなるを知らず、徒に兒の言を聽きて、以て之を疑へり、慚悔の極、穴の入る可きもの無きのみ」と。是れ一場の話說なりと雖、然れども諸老奉行より、以て監察諸有司に至るまで、苟も人を治むる責ある者は、皆、意を此に留めざる可からず。否ざれば偏聽、人を誤り、忠邪、地を易へ、雛僧の父たらざるものは幾ど希なり。汝等、其れ牢記して忘るること勿れと。

〔摘解〕太公＝こゝでは家康公を指していうたのである。○老臣＝おもなる家來、○雛僧＝雛は「ヒナ」で、之を人にすれば、「コドモ」である。故に雛僧とは「幼き僧」即ち「小僧」といふことである。○山衲＝は山僧といふに同じ。「衲」は「僧の著る衣」のことであるが、轉じて「僧」といふ意味にも用ゐるのだ。○出家＝は「家を出でて佛門に入る」といふことで、即ち「僧」のことである。○鞭撻＝ムチウツこと。○擂＝の音は「ライ」であつて、「スル」とよむ。「研」と同し意味である。○豉の音は「シ」である。「ミソ」といふ字。○研法＝研り

カタ。○呵責＝呵リ責ムルこと。○内逼＝便ヲモヨホスこと。○冷眼＝スゴイ目ツキ。○厠＝は「シ」といふ音で、「便所」のこと。○叩＝の音は『コウ』で「タタク」とよむ。「問フ」こと。○渠＝の音は「キョ」で「カレ」とよむ字。○頂＝イタダキ。○薙髪＝髪ヲ薙ルこと。○創痕＝キズアト。○緇素＝の「緇」は「黒色」で、墨染の衣を著る僧のことと。「素」は「白色」で、白衣を著る俗人のこと。○研槌＝スリコギ。○圊＝は厠」に同じ。「カハヤ」をいふ。○需＝待ツ。○小人＝は、「身分ノ賤シキモノ」をいふ場合とあるが、今、本文では、自己のことをいふたのである。○奉行＝は「命を奉じて其の事を行ふ」といふことで、諸種の役目の長をいうたものである。○監察＝目付。○有司＝官吏。

〔通釋〕家康公が、或時おもなる臣下と話をして、臣下に問うて曰はるゝに、「汝等は、『小僧の三箇條』といふ話を聞いたことがあるか」と。そこで臣下は皆之に答べて「未だ聞いたことはありませぬ」というた。それから家康公は次の如くに話をされた。昔、山僧があつて、一人の小僧を里から迎へて。晨夕その小僧を種々の事に使役して居た。ところが或日その小僧が逃げ歸つて、泣いて其の父に訴へていふには、「ワタクシハは既に僧となりました。そこで艱難辛苦は無論ワタクシの少しも厭はぬ所であります。しかし但わが師の、我をあしらはるゝことが甚だ無狀でありまして、殆ど堪へ忍ぶことの出來ないやうなことがあります。其の一は、師が常にワタクシに命じて其の頭を剃らしめられまするのに、どうかした拍子で一たび剃刀を使ひ誤りて、血が出

○怒も瞋も共に「イカル」とよむが、怒は「ハラダツ」といふ意味で、瞋は一目ニ角ヲ立ツルコトである。

るやうのことがあれば、直にワタクシをむちうたれます。其の二は、晨に起き出でて味噌を擂るごとに、師は、擂りかたが十分でないというて、目に角たて、ひどくワタクシを呵り責められます。其の三は、ワタクシが便をもよほしまして起ちあがるごとに、師は、すさまじい目つきでワタクシを見やつて、『汝は又また便所にゆくのか』といはれます」とのことであつた。すると、父はそれを聞いて大に腹を立て、走つて山僧の許に往いて、山僧を見て曰ふには、「セガレは久しく師の御恩を受けて居ります。然るに今、已むを得ざる事が出來ました。故に我儘なる御ねがひを致しまするが、どうかセガレを受取りまして、共に歸りたいと存じます」との申出であつた。山僧は、小僧の父の言葉といひ顏色といひ、其のただならぬを視て取つて、しづかに其の連れかへらうとするわけを問うた。乃で、小僧の父は、「セガレがワタクシに『かやうかやう』に告げました」と答へた。それを聞いて、山僧がいふには、「是はよくよく辯解をして置かねばならぬことである。其の頭を剃るについての件は、カレ既に其の頂を圓くして僧となつた以上は、髮を剃ることの勞は、之を他の人にたのむことは出來ぬ。故に拙僧は吾が頭をカレに借して、剃刀の使用法を練習する地としたのであつて、渠は今既に自ら其の頭を剃ることが出來るまでになつた。然るにひとり余が頭を剃るときだけは、故意と剃刀を使ひ誤り、其れが爲に、余の頭には創痕が縱橫について居る。又その味噌を擂る事に就いては、凡そ僧侶の家といはず俗人の家といはず、味噌を擂るには必ず研槌を用ゐて研るのに、渠はひとり柄杓を以て之を擂る。故に其の柄杓は、

擂るがまゝに折れてしまひ、毎晨、折ることが二三本以下ではない。又その厠に上る云々のことは、此の寺において、新に一の便所を作り、其の便所は、ひとり縣の吏員が來宿せらるゝときの用に供へてある。然るに渠は、其の便所が近くして、その上に清潔であるのを利として、便ごとに、たやすく其れに往き、之を禁ずるけれども止まない」と。其の言の未だ畢らぬうちに、小僧の父が拜謝して地に平伏し、「ワタクシは、師の厚き誨が、今承るとほりであることを知らずして、徒に我が兒の言葉に耳を貸し、而して之を疑つて居ました。まことに慚しさ悔しさ極まりまして、穴あらば入りたい心地が致します。」というて、ひたすら後悔してわびた、といふことである。これは唯に一場の話説ではあるけれども、重要の地位に在る臣下のもの又は諸奉行より、

「借」の字は、ここでは「カス」とよむべき場合である。

目付役その他の諸役人に至るまで、若も人を治むる責任ある者ならば、皆ここゝろを此の點に留めなければならぬ。否されば、單に一方の言葉だけを聽いて人を誤り、忠ある者を罰し邪なる者を賞し、即ち、忠邪其の賞罰を反對にして、前に話した小僧の父のやうになつてしまはない者は、幾ど少なくて、大概は其のやうになりがちのものである。汝等それ此の事を牢く記憶して忘るゝことなかれと。

○寧靜子曰。板倉重宗之代レ父爲二京尹一矣。請二敎於勝重一。勝重擧二此話一以答之。則其說流傳已久矣。夫兩造不レ具備一。五辭不レ可レ聽。斷レ獄者。最不レ可レ無二此慮一也。

○寧靜子曰く、板倉重宗の、父に代りて京尹と爲りしとき、敎を勝重に請ひ

しに、勝重は此の話を擧げて以て之に答へきといへば、其の說の流傳すること已に久し。夫れ兩造、具備せざれば、五辭聽く可からずといへり。獄を斷ずるもの、最も此の慮なかるべからず。

〔摘解〕板倉重宗＝は板倉勝重の子。○京尹＝は德川時代に於ける京都所司代のことで、所司代の職掌が、唐官の京兆尹と大抵同じいから、其の京兆尹に比し、なほ之を略して京尹といふたのである。○兩造＝の「兩」とは原告と被告とをいひ、「造」は「イタル」とよむ字であるから、即ち「法廷に至る」といふことである。○具備＝とは、訴訟の證據が明かに具はることをいふ。○五辭＝とは「五刑に關する辭」といふこと。五刑とは。墨（イレズミ）劓（ハナキリ）刖（アシキリ）、宮（陰莖ヲキルコト）、大辟（死罪）、の五とほりの刑罰をいふ。○斷獄＝訴訟の裁判をすること。「獄」は「ウッタヘ」とも「ヒトヤ」ともよむ字であるが、ここでは「ウッタヘ」といふ意味である。

〔通釋〕寧靜子の論にいはく、板倉重宗が其の父勝重に代つて京都所司代となられたときに、敎を勝重に請はれたところが、勝重は此の雜僧三箇條の話を擧げて之に對へられたといふことだから、其の說が世に傳はり來つて居るのは、已に久しい前からのことであるに相違ない。其れ裁判の事に當るものは、原被兩告が共に法廷に至つて、其の上に證據が明かに具はるでなければ、刑罰に關する言論を聽いてはならぬといふことがあるが、公事訴訟を判決するものは、第一に此の心得がなくてはならぬ。

寧靜子とは大槻盤溪先生の事である。先生は名を淸崇といひ、字を士廣と稱し、盤溪は其の號で、仙臺藩の儒臣となり、詩文で名高くつて、明治十一年に、七十一歲で歿せられた。

此の文は、先生の著された近古史談の中から抄つたのだ。

春夜宴ニ桃李園一記

○夫レ天地者萬物之逆旅。光陰百代之過客。而浮生如レ夢。爲レ歡幾何。古人秉レ燭夜遊。良有レ以也。況陽春召レ我以ニ煙景一。大塊假レ我以ニ文章一。會ニ桃李之芳園一。序ニ天倫之樂事一。群季俊秀。皆爲ニ惠連一。吾人詠歌。獨慚ニ康樂一。幽賞未レ已。高談轉ク清。開ニ瓊筵一以坐レ花。飛ニ羽觴一而醉レ月。不レ有ニ佳作一。何伸ニ雅懷一。如レ詩不レ成。罰依ニ金谷酒數一。

○夫れ天地は萬物の逆旅にして、光陰は百代の過客なり。而して浮生は夢の如し。歡を爲すこと幾何ぞ。古人が燭を秉りて夜遊びしは、良に以あるなり。況や陽春我を召すに煙景を以てし、大塊我に假すに文章を以てするをや。桃李の芳園に會し、天倫の樂事を序す。群季俊秀にして、皆惠連たり。吾人の詠歌は獨康樂に恥づ。幽賞未だ已まずして、高談轉清し。瓊筵を開いて以て花に坐し、羽觴を飛ばして而して月に醉ふ。佳作あらずんば、何ぞ雅懷を伸べん。如し詩成らずんば、罰は金谷の酒の數に依らん。

〔摘解〕逆旅＝旅館をいふ。逆は迎といふ意味で、逆旅とは旅人ヲ迎フル意味である。○百代＝限なく永きあひだ。○過客＝すぎゆく旅客。○浮生＝定めなき人生。○陽春＝溫暖なる春。○煙景＝霞たなびき、四方の山の梢もうちけぶりたる好きけしき。○大塊＝地球のこと。塊は「ツチクレ」とよむ字。○文章＝山川や禽獸草木などの如き、アヤモヤウをなして美しき者をいふ。文字を綴りあはせて思想を表はすものも文章といふが、文章とは、アヤモヤ

この文は、唐の李白といふ人の作である。李白は字を太白といひ、青蓮と號し、詩に於いては、支那古今の名人といはれて居る人だ。